

婦人子ども

第十四卷  
第十二號



大正三年十二月五日

フレーベル會

第十四卷第十二號目次

フレーベル會に對する希望 野尻 精一

幼稚園教育雜感 湯原 元一

我國幼稚園兒童身體發育調查 安井 哲

おちば 久留島 武彦

『ボール・ドンビー』 岡田 みつ

雜 錄

京阪神三市聯合保育會——靜岡縣保育會——東京

市保育研究會

フレーベル自傳 (第十二回) 倉橋惣三譯

本誌定價

一冊 郵稅共金拾壹錢 六冊前金郵稅共六拾錢  
拾二冊同金壹圓貳拾錢 郵券代用 一割増

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

(庶務上保姆紹介に關する件を含む)の御手紙は  
東京市小石川區久堅町七十四番地フレーベル會事務所宛

會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、  
雨森劍宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々  
木山谷一二四倉橋惣三宛

大正三年十二月四日印刷  
大正三年十二月五日發行

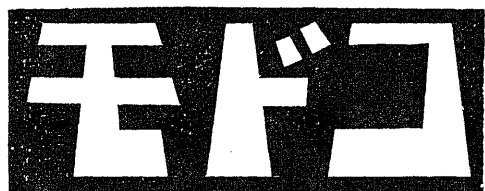
編輯兼發行者 倉橋 惣三  
東京府豐多摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四

印刷者 東京市本所區番場町四番地 登  
印刷所 東京市本所區番場町四番地

發行所 東京市小石川區久堅町七十四番地  
フレーベル會



顧問 高島平三郎先生



一冊拾錢  
郵稅分五厘  
六冊稅分  
金郵稅共  
五十八錢  
十圓拾錢  
壹圓拾錢

定價

畫雜誌

綺麗な  
面育的  
教

日一本

每月一回

モドコ 社發行

東京市小石川區林町五七  
振替東京二七九六三

# フレーベル會に對する希望

(フレーベル會總會に於ける演説)

奈良女子高等師範學校長 野 尻 精 一

私はフレーベル會即ち本會の創立以來、或は評議員やら或は客員やらなか／＼責任のあり名譽もある位置においていたかったのでありますが何の御役にも立たないで誠にに相すまぬ事と思ふて居ります。

此度は恰度上京中に總會がひらかれるといふ事でありましたから拜聴かた／＼出席いたしました次第で御座います、お話といふほどの事ありませんが、本會について感じました事を一二申上げて置たいと思ます。

フレーベル會といふのは以前に女子高等師範附屬幼稚園内にあつた幼児保育法の研究を目的とした會と、其頃東京市内にあつた之と類似の二つの會との合併したものであります。大體同じやうな

性質の會が三つ別々にあるのは不便であるから、協同して研究しやうじやないかと云ふ事で一所になつたのであります。私も其頃多少關係して居ましたが、さて此合併の會を何と名づけやうかと云ふ事について大分議論がありました。三つの會のいづれを取つても他の二つに義理がわるいといふ事からいつそフレーベル會と命名したのであります。之れは幼稚園の發達に盡力せられたフレーベルに敬意を拂ふつもりから思ひついたものと覺えて居りますが、今日こゝに出ますについて思ひついた事は、今日は此名を改められてはどうかといふ事であります。如何となれば本會は今日に於ては單に子供と幼稚園との關係を研究するばかりでない、廣く幼兒について研究して其發達をはかる

やうになつて居るのであるから今少しひろい意味の名を附けられては如何かと思ひましたのです。

それから本會は皆さんの御盡力によりまして或は有益なる雜誌をば發行になり、或は履々講演を開かれたり、また夏季休暇を利用して保姆の爲めに講習を開かれなどして、益々發展を遂げてまゐりまして、創立の際から關係をもつて居りました私は誠に満足に喜ばしく思ひ居る次第で御座います。がなほ將來は幼稚園についてのみならず家庭に於ける保育法についても十分に研究せられて家庭に於てかういふ事の注意が必要であるとか、どの方面に氣をつけないければならぬとか云ふやうな事を實際に行はれるやうに親切に指導しておもらひしたいと存じます、今一つ考へました事は幼児について來る附添人に幼児保育に必要な智識を與へると云ふやうな事、また上流の家庭にはいる家庭教師の爲めに講習といふやうなものを設けられては如何といふやうな事で御座います。

下層社會の幼児教育も決して等閑に附すべからざる大問題で御座います。幸ひ二葉幼稚園などで此の貧兒の爲めに大に盡力せられて居て、誠に感謝すべきことで御座いますが、一つや二つでは決して十分でありませんから、どうか今後かういふ性質の保育所が續々設立せられるやうに、御盡力いたされたいものと、切に御願ひいたしておきます。

それから幼稚園と小學校の關係につきましても此頃議論があるやうであります、その中幼稚園は非常に自由であつて小學校で俄に規律が嚴重になるといふやうな點について、幼稚園でも大きな子供には相當の規律を守らせるやうにして、小學校との懸隔があまり甚だしくならぬやうにするがよいはないかといふ説も大分あるやうに御座います。幼稚園に於ても幼兒の機能の發達と共に讀書算術位は教へてはどうかといふやうな事、また小學校が簡易に過ぎて子供があつけないやうな事な

いかといふやうな事もいはれて居ります。それで研究の爲めの場合によつては幼稚園出身の一學級を組織して進歩の出來たものはさせて見るのも一つの試験になりはせぬかと考へられます。

とりとめもなくさま／＼の事を申上しましたが萬

## 幼稚園教育雜感

(フレーザー會總會に於ける演説)

東京音樂學校々長

湯 原 元 一

題しました通り私は雜感を申上げて見たいと思ひます。

我が國の幼稚園教育はよほど進んで居るので御座います。此事は日本で自稱して居るのみならず歐米の各國に於てもすでに之を認めて居るので御座います。

しかし、更に幼稚園の任務及び將來の運命といふやうな事について一考して見ると、まだなかなか大問題が残つて居るやうに思はれます。

一將來御研究の御參考にもならば後に爲と存じます。

終にも一つ希望いたしたいのは、全國幼稚園關係者合同の一つの會合を持つて互に相琢磨いたしたい事で御座います。(筆記、文責在編者)

なるほど幼稚園はたしかに結構なもの、自分たちの子供も幼稚園の御蔭を蒙つてよほど成績がよいのでありますが、さて此結果のよい幼稚園教育をどの範圍まで擴めてゆくか、どうせよいものならば小學校の如く公費を以てあらゆる方面に擴張して、いづれの家庭に於ても其幼児を入園させる事にしてはどうであらうかと考へると、之には大分問題があるので御座います。まづ經濟問題がさきに立つて來ます。今日の小學校の義務教育だけ

でさへも、大分困つて居るといふ貧民がなくな  
い、六年を八年にしたいといふ計畫をさへも行は  
れかねて居る有様であります。然るに此上になほ  
幼稚園へ義務的に入れさせやうと云ふ事は到底出  
来がない事のやうに思はれる。

今一つ此事の行はれたい事情がある、それは  
家庭の問題であります。現今女子教育の目的は良  
妻賢母となつて居る、その良妻としても賢母とし  
ても最大切な務めは子供を教育するといふ事であ  
ります。それを絶體的に子供を幼稚園に入れなけ  
ればならぬとなると、幼稚園で賢母の仕事を取り  
あげるやう事になりはしまい、少くとも半以上  
家庭の仕事を減じる結果になりはせぬかと思はれ  
ます。

勿論幼稚園は、家庭の仕事を奪ひ取る爲めでな  
く、之を補充しやうといふ主張のもとに設立せら  
れて居るのですが、實際は幼稚園に入れると、家  
庭の方で油断して一切任せてしまつたといふやう

な氣になりはしまいかと、思はれるので御座いま  
す。

それで文部省の方でも、幼稚園はあつて差支な  
いが、小學校と同じやうに義務教育にしやうとす  
るつもりはないのであります。しかし、幼稚園の  
効蹟が著しいといふ事を認めた以上、此始末をど  
うするかといふ事は、さしせまつてどうといふで  
はないが、長い間には教育家が考へなければなら  
ぬ問題であらうと思ひます。

今日の日本の幼稚園は中流以上の子女でなけれ  
ばは入る事が出来ないやうである、中流以上でも  
よほどいゝ處でないといけないやうである、なほ  
此ことをよく考へて見ると、中等以上の家庭では  
大體から云つて、主婦たるものに育児の心得も相  
當にあり、かつ時間に餘裕があつて、子供を教育  
するのによほど都合がよいわけである。而して中  
流以下幼稚園へゆく事の出来ない子供の方は、母  
親に何等の教育もなく朝から晩まで勞働に追はれ



て居て、家庭教育の補充どころではない、全部を引き受けてやらなければならぬやうな有様にあるのでございます。幼稚園の力をかりなくとも、どうか家庭教育を受ける事の出来る家庭の子供ばかりから幼稚園が成立つて、必ず幼稚園教育を受ける必要のある子供がますます野良育ちとなるといふ事は誠に憂ふべき現象ではありますまいか。それでは中流以上の子供はいやが上によくなる、以下の子供はいやが上にわるくなるといふ不公平が行はれて来るのでございます。

此點に於て、西洋では日本と反對になつて居るやうです。日本で幼稚園の始めて出来た頃は、萬事萬端西洋の模倣時代で、とにかく西洋に幼稚園といふものがあるから日本でもやつて見やうぢやないかといふやうな事で、たしか米國あたりをまねたものと思はれます。

西洋の幼稚園の始めは、小學校と同じく貧民の幼児教育所でありました。托兒所といふやうな性

質のもので、幼児が下層社會の惡影響を受けないやうにといふ目的で設立せられたものでした。それを、たいへん消極的に惡感化を受けないといふだけではいけないといふので、フレーベルが積極的に之を教育する事に着手したのであります。慈善的に貧民の子供を預つて、晝食をふるまひ、おやつを與へてその上に幼稚園の教育をしようとしたのであります。托兒所といふのは名前がよくないと云ふので平民的幼稚園といふ名に改正したのでございます。

現今日本の政府では幼稚園のために別に金を出して之を奨励しやうとはしないでなりゆきに任せて居るやうである、上下共に家庭の責任を重んずるやうにつとめさせやうとして居るやうに見受けられる、西洋あたりでも、社會警醒者は頻に「家庭に歸れ」と云ふ事を云つて居る。工場などでも賃銀を増して、なるべく亭主だけはたらいで、妻君は家庭で子供の守りが出来るやうに、また、亭主

の勞働時間も出来るだけ少くして、せめて夕方には家庭に歸つて子供の顔を見て楽しむやうにといふ風に社會政策をむけて居る。ベルリンなどでは全く貧乏人らしいものは見えません。衣服などちやんと整頓して居るので一寸見てはわからないのです。貧民窟なども高壯な建物の中にあるのですから、外からはどうしてなか／＼立派なものです中には可なりの貧民が住んで居るが、とにかく社會政策がさうした風にむけてあります。そしてまたそれが自慢なのです。

それで幼稚園の如きも明に托兒所の性質を帯びて居ります。其外夏だけ子供の世話をする處もある、勞働の時間中だけ預る處もあります。其他、工場内に幼稚園を設けて、その職工の子供は必ずは入るといふ組織のものもあります。獨立した幼稚園では滿二歳から四歳までの子供を預る處もあり、四歳から七歳までのを入れるのがあります。或は女學校に附屬させるのがあります。

英國あたりでは滿五年以上の子供のは入る幼稚園で小學校の準備教育を引き受けて居るのがあります。我國の慶應大學のやうに、高等中學校程度の學校に中學校小學校幼稚園など附屬して居るのがあります。是等の中には、中流以上の子供のは入るのがありますが、大體の上から云ふと、やはり貧民の子供を預る所、勞働者の托兒所として利用してあります、また別に托兒所の設けもあつて、平民的幼稚園のやうにおやつ、御馳走になつて、遊んで、家に歸るといふのもあります。パリあたりの幼稚園は必ず兩親が朝送つて來て夕方つれて歸るやうになつて居て、明に托兒所の性質を持つて居ります。以上の如く歐洲では、幼稚園は勞働者の爲めに、家庭でよく教育する事の出来ない貧民の子供の爲めに設立せられてあるといふ事は動かすべからざる原則のやうであります。日本の幼稚園とは由來を異にして居るやうであります。見やうによつては、日本の幼稚園はその基礎が甚

た薄弱であるといふ事も出来ると思ひます。必要に迫つて居る方面をなげやりにしてあまり必要のない處に力瘤を入れて居るのではないかと思はれる。

餘裕のある家庭で、子供を幼稚園に入れる結果主婦が家庭の義務をわすれるといふやうな事になりはしないであらうか、子供を幼稚園に入れた爲めに、主婦の最大切な務めである子供の教育を怠るといふやうな事があつては由々敷一大事であります。幼稚園は家庭教育の補充をなすに過ぎないといふ事を主婦たるものがよく／＼承知して居なくてはならないと思ひます。西洋でさへ「ホームに歸れ」と叫んで居るのに、家庭本位の我國に於て、家庭が空虚になるやうな事があつてはそれこそ大變であります。

以上述べましたやうな次第でありますから、幼稚園教育にあづかつて居られる方ではよい家の子供ばかりなく、どうか可愛さうな労働者の子供を

も之を教育して、よくするといふやうな事を献身的にやつて見ていたゞきたいと御願ひいたすので御座います。研究の方から云つても、あらゆる方面を見るといふ事は大切であります、如何なる善良なる周圍が、如何なる善良なる感化を兒童に與へるか、また如何なる不良なる周圍が如何なる不良なる影響を及ぼすかといふやうな事を研究するのもおもしろい事であらうと思ひます。よく社會を研究して、社會の爲めに最大切なる最必要欠くべからざる補充機關として幼稚園の基礎を固くしたいものと存じます。

どうか日本でも中流以下の労働者や貧民の爲めに托兒所の性質を帯びた幼稚園が、ドン／＼設立せられん事を希望に堪へないので御座います。幼稚園はフレーベルの昔に歸つて托兒所の性質をもつた平民的のものにしたいもので御座います。近來西洋では、いろ／＼の方面に幼稚園を設けて居る。看護婦の團體が慈善的に貧民の子供を集めて

之を教育して居るのもあります。此頃流行るモン  
テッソリー女史などもローマ貧民窟の子供を教育  
した経験がその教育主義の土臺になつて居るので

御座います。どうか日本でも此種の慈善的幼稚園  
の今後盛に建設せられん事を切望して居る次第で  
御座います。(筆記、文責在編者)

### ○緊急御注意

本會主催全國幼稚園關係者大會の義につき、全  
國幼稚園の御賛同を得度く、先月廿五日迄に御返  
事願ふ趣、先般書面を以て御照會致しましたるに  
對して、未だ何等の御回答なき園がありますのは  
遺憾至極であります。何卒至急御賛同の御表明御  
一報下さるよう重ねて切望致します。

### ○編者より

○今年も本號を以て終ります、寄稿者諸君及び讀者諸君の本誌  
に對する一年間の厚き同情を深謝いたします。

○一年間連載しましたフレーベル自傳も、いよいよ第十二回を  
以て完了しました。御覽の通り、フレーベルの傳記としては未だ途  
中でありますし、殊に其の生涯の最も興味多い部分が澤山残つて  
居ます。しかし、自傳が茲で終つて居るのですから止むを得ませ  
ん。たゞフレーベルの一生に大關係を持つ幼時から、教育的經歷  
の大部分、乃至種々の場合、種々のことから其の人生觀を形づく  
つてゆく關係などが、フレーベル自身の一種特有な發表法によつ  
て、フレーベル研究上の或る基礎的參考を與へ得る點は、必ずし  
も尠くないと信するのであります。兎に角、普通の讀みものと  
して餘り面白いものではありませんが、フレーベル研究に缺くべ  
からざる此の資料の日本譯を得たことは、斯界に對する多少の貢  
獻たることを信じて居る次第であります。因に本年内に完結の都  
合上本號分が非常に多くなりました。之れば御諒承を願ひます。

# 我國幼稚園兒童身體發育調查

東京女子高等師範學校  
附屬幼稚園主事

安井哲

我國幼稚園兒童の身體發育の標準に關する最近の調査がして見たいと思つて居りましたので、東京女子高等師範學校女子敎育研究部の調査題目として之れを提出し、倉橋講師本間校醫と共に其委員として之れを調査することになりました。そこで大正二年六月左の測定票を我國府縣市町立の主なる幼稚園八十六に送り、規定に従つて測定記入することを御依頼致しました。其中回答のないものと、規定に合はなかつたものを除き、七十二の幼稚園の兒童に就いて、大正二年七月調の體格検査成績に對して調査を行ひました。

## 身體測定票 (幼兒一人 毎ニ記入)

男 (男兒ナレバ女ノ方ヲ、女兒ナレバ男ノ方ヲ消サレタシ)

| 生 年 日    | 檢 査 日    | 身 長   | 體 重   | 胸 長   | 指 極   | 胸 圍   | 頭 圍   | 幼稚園所在地 |
|----------|----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 明治 年 月 日 | 大正 年 月 日 | 尺 寸 分 | 貫 匁 分 | 尺 寸 分 | 尺 寸 分 | 尺 寸 分 | 尺 寸 分 |        |

### 備考

#### 一、身長

足袋、靴等ヲ脱セシメ兩膝ヲ密接シ背及ビ後頭ヲ壁ニ密着シテ直立シ兩上肢ヲ鉛直ニ垂レ頭部ヲ正位ニ保タシメ小桿(成ルベク水準器ヲ附シタルモノ)ヲ用フルヲ可トス。ナ頭頂ニ水平ニ横ヘテ測定セラレタシ

#### 二、體重

成ルベク検査服ヲ着用セシムルヲ可トシ若シ着衣ノ儘ナル時(検査服ヲ着用セシムル時モ亦同シ)ハ其風袋ヲ全量ヨリ引去ラレタシ

### 三、肩長

成ルベク薄キ下着ヲ着用セシメ水平面ノ椅子ニ腰掛ケシメ椅子面ヨリ頭頂ニ至ル高サヲ身長測定ト同法ニヨリ測定セラレタシ

### 四、指極

全手ヲ左右ニ(肩ノ方向ニ水平ニ)伸バシ兩中指端間ノ距離ヲ測定セラレタシ

### 五、胸圍

兩上肢ヲ鉛直ニ垂レ自然ノ位置ニ位置アラシメ乳頭ノ水平線ニ於テ吐氣時(氣息ヲ自然ニ吐キ出シタ時)測定セラレタシ

### 六、頭圍

前額部ノ中央ノ水平線ニ於テ測定セラレタシ

## ●●●●● 調査の方法

私共は右の材料を二の方法に依つて調査致しました。其第一種は普通の算術平均を求むる方法で即ち體重、身長、肩長の各項目に就いて測定した同年齡の男女各幼兒の成績の總和を其年齡に於ける幼兒の總數で除したのであります。今體重に就いて此意味を説明して見ますと、四年の男兒の總數が百五人ありますと、此兒童の一人一人の體重を加へて得た結果を、幼兒の總數百五で除すれば即ち四年男兒の體重の平均を得るのであります。其他の年齡其他の項目に就いても之れと同様に算出したので、其結果は即ち左表の通りであります。

|    | 四年   |      | 五年   |      | 六年   |      | 七年   |      |
|----|------|------|------|------|------|------|------|------|
|    | 男    | 女    | 男    | 女    | 男    | 女    | 男    | 女    |
| 體重 | 三、七二 | 三、五三 | 四、〇四 | 三、九二 | 四、三〇 | 四、一五 | 四、四二 | 四、三五 |
| 身長 | 一、三一 | 一、〇六 | 一、二七 | 一、二四 | 一、四二 | 一、三八 | 一、五九 | 一、四六 |
| 肩長 | 一、八三 | 一、八一 | 一、八八 | 一、八六 | 一、九五 | 一、九四 | 二、〇一 | 一、九七 |
| 指極 | 三、〇〇 | 二、九六 | 三、二〇 | 三、〇九 | 三、三六 | 三、二七 | 三、四四 | 三、三四 |
| 胸圍 | 一、六三 | 一、五五 | 一、六八 | 一、六三 | 一、七三 | 一、六七 | 一、七五 | 一、七四 |
| 頭圍 | 一、六二 | 一、五九 | 一、六四 | 一、六二 | 一、六五 | 一、六三 | 一、六七 | 一、六五 |

第二種の方法は體重、身長、肩長等の各項目に就いて測定した各年齡の男女幼兒の成績中最多數を占むる者を調査したのであります。其結果は左に舉ぐる第一號より第十二號に至る表の通りであります。今其了解を助くるために、第一號表に就いて説明して見ますと、表の左側より60までの數は、人員の百分率を示したもので、各縦線は身

長の各區域で、例ば第一線は二尺九寸より二尺八寸五分まで即ち二尺八寸臺の區域、第二線は二尺九寸より二尺九寸五分まで即ち二尺九寸臺の區域を示すので、以下之れと同様の意味であります。

そこで四年の男兒の身長を此表で調査して見ます。

|                  |        |
|------------------|--------|
| 二尺八寸臺の者          | 百分七人   |
| 二尺九寸臺の者          | 百分十一人  |
| 三尺臺(三尺一寸に達せざる)の者 | 百分三十三人 |
| 三尺一寸臺の者          | 百分二十七人 |
| 三尺二寸臺の者          | 百分十二人  |
| 三尺三寸臺の者          | 百分七人   |
| 三尺四寸臺の者          | 百分二人   |

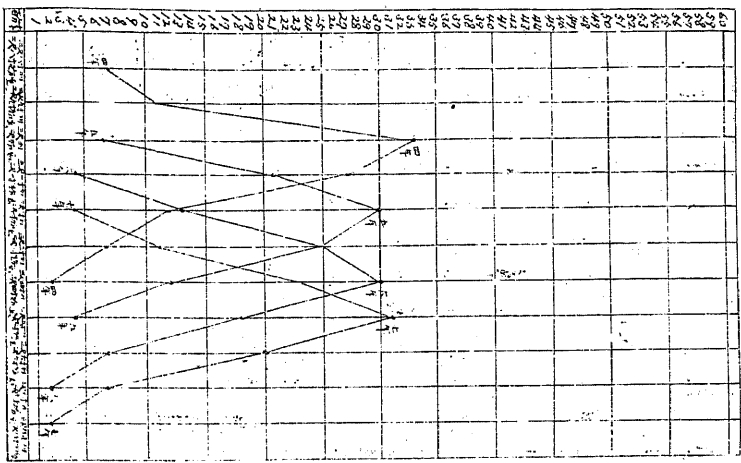
で、即ち此年齡に於ける兒童の最多數は身長三尺より三尺九分までの間の者でありますから、三尺臺(即ち三尺より三尺〇九分迄のもの)を以て此年齡に於ける男兒の身長標準と認めるとが出来るのであります。其他の年齡に於ても、又其他の項目に於ても之れを推して了解することが出来ませう。

故に各曲線の最高頂點は、各年齡の幼兒の最多數が表はす發達の程度で、各曲線の最下底は其の年齡の幼兒の最少數が表はす發達の程度を示すのであります。今第一號表に就て説明しましたことは、之れを第二號より第十二號までに應用して考ふることが出来ます。

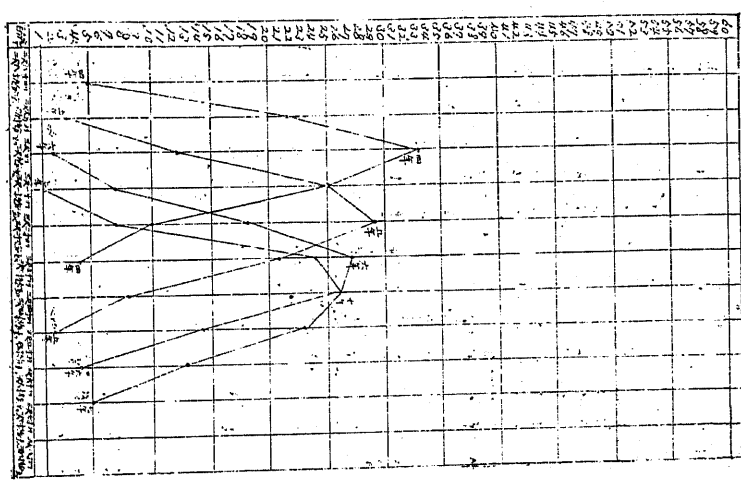
## 二種の方法に依りて得たる結果の比較

第一種の方法に依つて得た算術平均の結果は、各年齡に於ける唯一個の標準價を示す者でありますが、第二種の方法に依つて得た結果は、各年齡に於ける種々の發達程度を示すのであります。而して各曲線の頂點が第一第二第五第六諸表の如くに、年齡の増加と共に次第に右方に移動する者与其他の表の如く異つた年齡に於ける曲線の頂點が同一線内にある者とに關せず、其曲線全體は年齡の増加と共に次第に右方に移動して居るのを發見するのであります。且又第一種の算術平均の結果と、第二種の最多數調査の結果とを照合して見ますと、大差のないことが解ります。

第一號 身長(男兒)

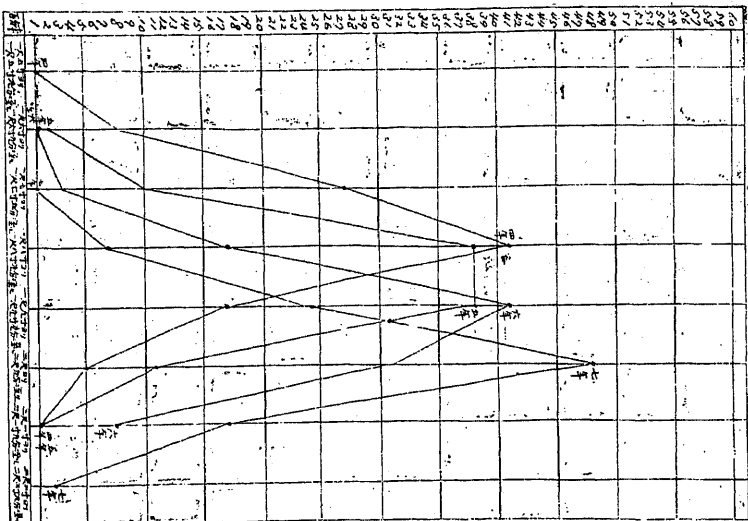


第二號 身長(女兒)

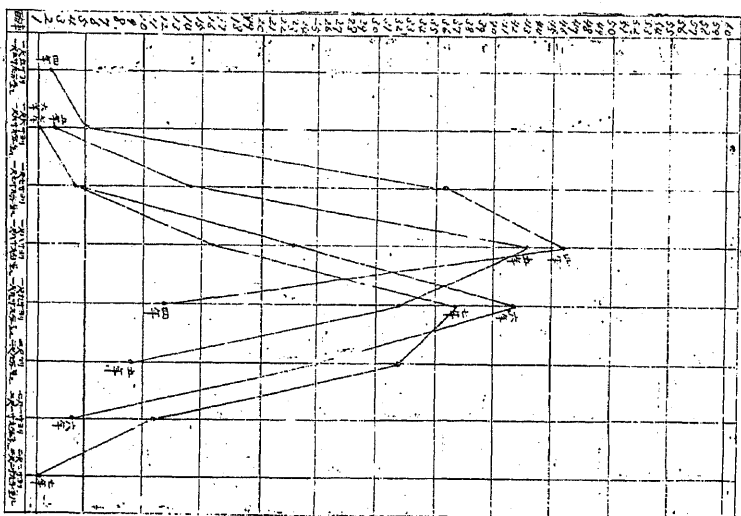




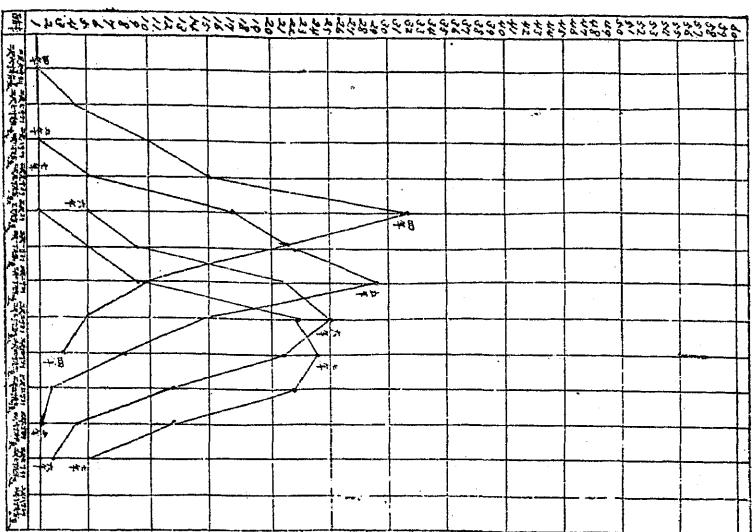
第三號 胴 長(男兒)



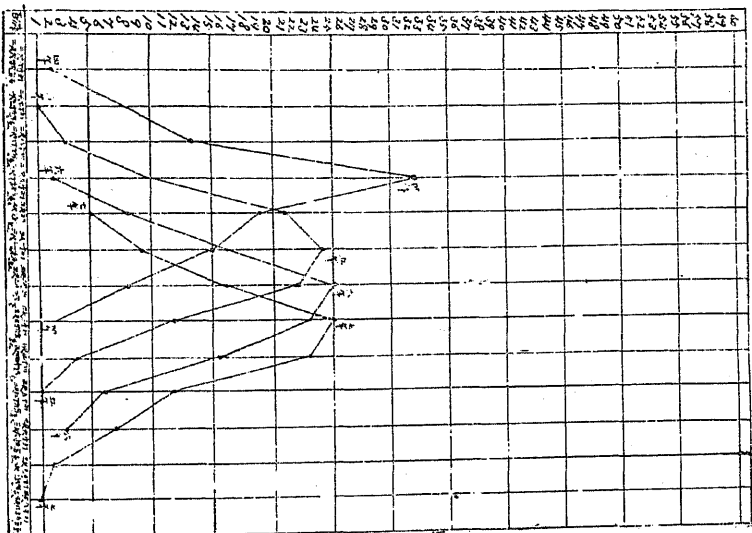
第四號 胴 長(女兒)



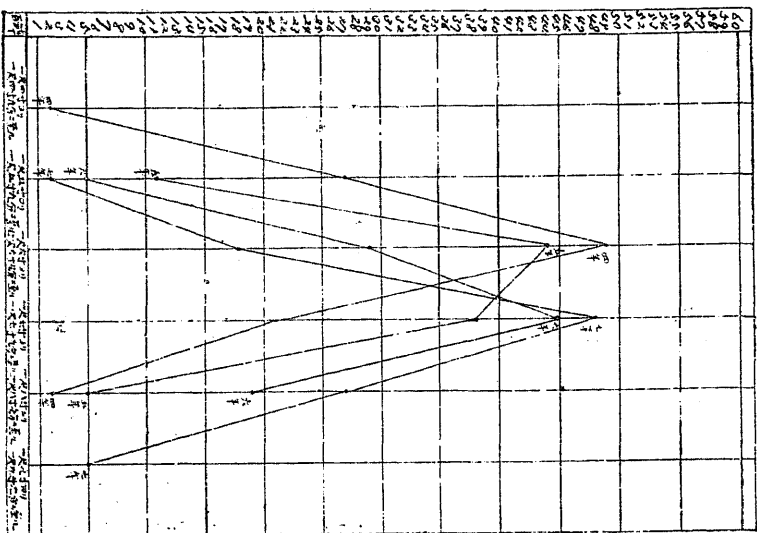
第五號 指 極(男兒)



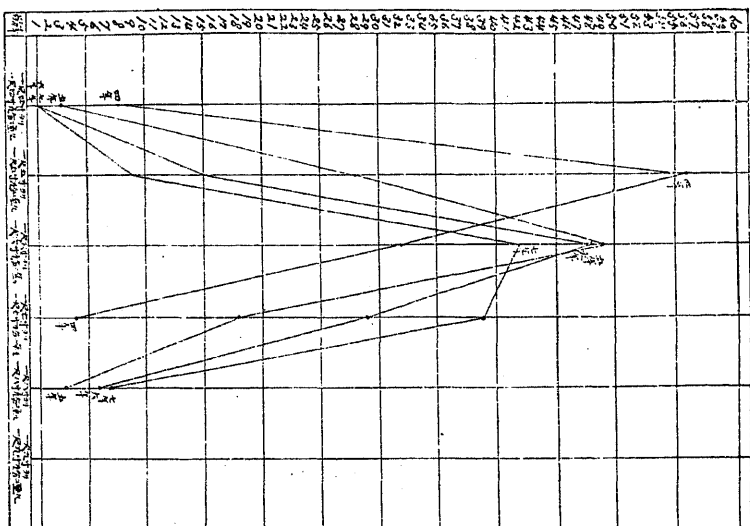
第六號 指 極(女兒)



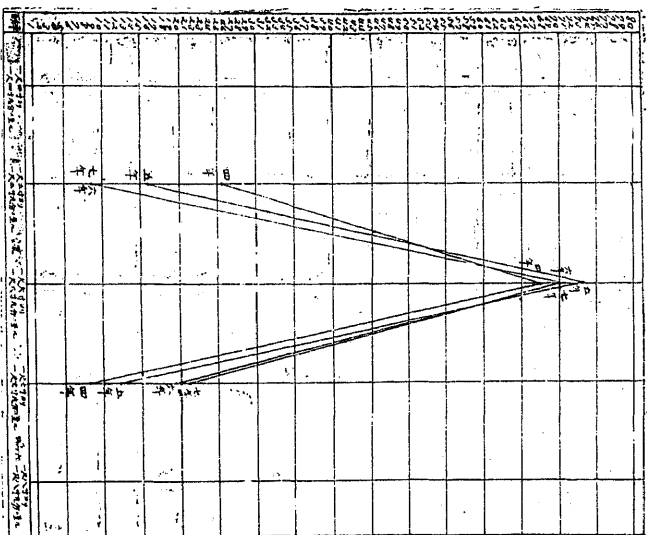
第七號 胸 圍(男兒)



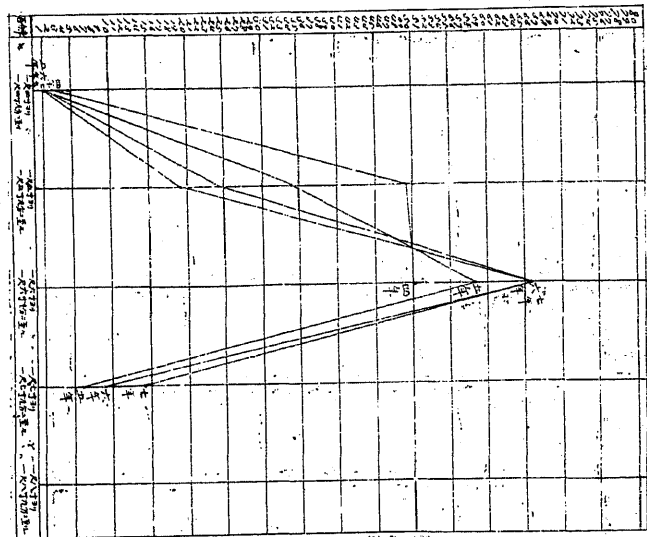
第八號 胸 圍(女兒)



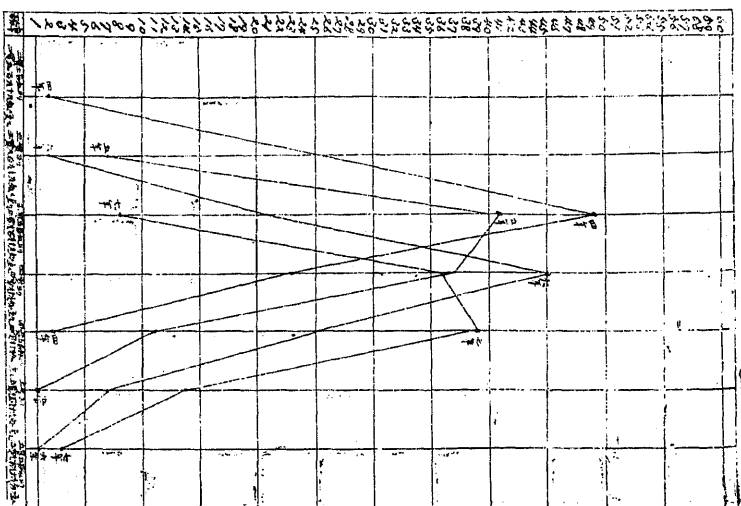
第九號 頭 圍(男兒)



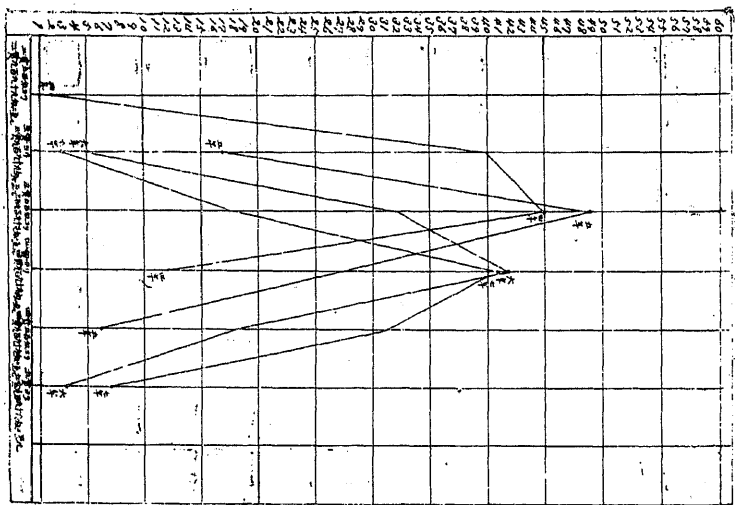
第十號 頭 圍(女兒)



第十一號 體 重(男兒)



第十二號 體 重(女兒)



尙右の曲線圖では發育狀態の大體を示すのみでありますが、該發育程度のものが百人中幾人の割合であるかを數字を以て表はし、且各年齢に於てそれぞれの發育程度が如何なる順位を占むるかを

明かにしたものが次の表であります。即ちⅠⅡⅢ等の羅馬數字は各順位を示し、其の下の算用數字は百分率を示せるものであります。

| 七 年       |           | 六 年       |           | 五 年       |           | 四 年       |           | 身 長                  |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------------------|
| 女         | 男         | 女         | 男         | 女         | 男         | 女         | 男         |                      |
|           |           |           |           |           |           | V<br>5    | V<br>7    | 至 自<br>寸二八二<br>分九八寸尺 |
|           |           |           |           | VI<br>3   |           | III<br>22 | IV<br>11  | 至 自<br>寸二九二<br>分九八寸尺 |
|           |           | VII<br>2  |           | IV<br>12  | V<br>6    | I<br>33   | I<br>33   | 至 自<br>寸三<br>分八 八    |
| VII<br>1  |           | V<br>7    | VI<br>4   | II<br>25  | III<br>21 | II<br>25  | II<br>27  | 至 自<br>寸三一<br>分九 一寸尺 |
| V<br>7    | VI<br>4   | III<br>18 | IV<br>13  | I<br>29   | I<br>30   | IV<br>10  | III<br>12 | 至 自<br>寸三二<br>分三 二寸尺 |
| II<br>24  | IV<br>11  | I<br>27   | II<br>25  | III<br>21 | II<br>25  | VI<br>4   | V<br>7    | 至 自<br>寸三三<br>分三 三寸尺 |
| I<br>26   | II<br>23  | II<br>26  | I<br>30   | V<br>8    | IV<br>12  |           | VI<br>2   | 至 自<br>寸三四<br>分四 三寸尺 |
| III<br>23 | I<br>31   | IV<br>14  | III<br>18 | VII<br>2  | VI<br>4   |           |           | 至 自<br>寸三五<br>分五 三寸尺 |
| IV<br>13  | III<br>20 | VI<br>4   | V<br>7    |           |           |           |           | 至 自<br>寸三六<br>分六 三寸尺 |
| VI<br>5   | V<br>7    |           | VII<br>2  |           |           |           |           | 至 自<br>寸三七<br>分七 三寸尺 |
|           | VII<br>2  |           |           |           |           |           |           | 至 自<br>寸三八<br>分八 三寸尺 |

| 六<br>年    | 五<br>年    |           | 四<br>年    |           | 指<br>極                    |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|---------------------------|
| 男         | 女         | 男         | 女         | 男         |                           |
|           |           |           | VI<br>2   | VIII<br>1 | 至 自<br>寸二六<br>分九二<br>尺六寸尺 |
|           | VIII<br>1 |           | V<br>8    | VI<br>4   | 至 自<br>寸二七<br>分九二<br>尺七寸尺 |
|           | VII<br>3  | VIII<br>1 | IV<br>13  | IV<br>10  | 至 自<br>寸二八<br>分九二<br>尺八寸尺 |
|           | V<br>10   | VI<br>5   | I<br>32   | III<br>15 | 至 自<br>寸二九<br>分九二<br>尺九寸尺 |
| V<br>5    | III<br>21 | III<br>17 | II<br>19  | I<br>32   | 至 自<br>寸三<br>分九二<br>尺尺    |
| IV<br>9   | I<br>24   | II<br>22  | III<br>15 | II<br>20  | 至 自<br>寸三<br>分九二<br>尺一寸尺  |
| II<br>21  | II<br>22  | I<br>29   | V<br>8    | IV<br>10  | 至 自<br>寸二<br>分九二<br>尺二寸尺  |
| I<br>25   | IV<br>12  | IV<br>15  | VI<br>2   | V<br>5    | 至 自<br>寸三三<br>分九二<br>尺三寸尺 |
| II<br>21  | VI<br>4   | V<br>8    |           | VII<br>3  | 至 自<br>寸三四<br>分九二<br>尺四寸尺 |
| III<br>12 | VIII<br>1 | VII<br>2  |           |           | 至 自<br>寸三五<br>分九二<br>尺五寸尺 |
| VI<br>4   |           | VIII<br>1 |           |           | 至 自<br>寸三六<br>分九二<br>尺六寸尺 |
| VII<br>2  |           |           |           |           | 至 自<br>寸三七<br>分九二<br>尺七寸尺 |
|           |           |           |           |           | 至 自<br>寸三八<br>分九二<br>尺八寸尺 |

| 七<br>年    |           | 六<br>年    |           | 五<br>年    |           | 四<br>年    |           | 胴<br>長           |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------------|
| 女         | 男         | 女         | 男         | 女         | 男         | 女         | 男         |                  |
|           |           |           |           |           |           | V<br>2    | VI<br>1   | 自一尺五寸<br>至一尺五寸九分 |
| VI<br>1   |           | V<br>1    | VI<br>1   | V<br>2    | IV<br>2   | IV<br>5   | IV<br>8   | 自一尺六寸<br>至一尺六寸九分 |
| V<br>4    | VI<br>1   | IV<br>4   | V<br>3    | III<br>14 | III<br>10 | II<br>36  | II<br>27  | 自一尺七寸<br>至一尺七寸九分 |
| III<br>16 | IV<br>7   | III<br>23 | III<br>17 | I<br>43   | I<br>38   | I<br>46   | I<br>41   | 自一尺八寸<br>至一尺八寸九分 |
| I<br>37   | II<br>24  | I<br>42   | I<br>41   | II<br>32  | I<br>38   | III<br>12 | III<br>17 | 自一尺九寸<br>至一尺九寸九分 |
| II<br>32  | I<br>48   | II<br>25  | II<br>31  | IV<br>9   | II<br>11  |           | V<br>5    | 自二尺<br>至二尺九分     |
| IV<br>11  | III<br>17 | IV<br>4   | IV<br>7   |           | V<br>1    |           | VI<br>1   | 自二尺一寸<br>至二尺一寸九分 |
| VI<br>1   | V<br>2    |           |           |           |           |           |           | 自二尺二寸<br>至二尺二寸九分 |

| 五年  |     | 四年  |     | 頭圖                 |
|-----|-----|-----|-----|--------------------|
| 女   | 男   | 女   | 男   |                    |
| IV  |     | III |     | 至 自<br>寸一四<br>分四寸尺 |
| 1   |     | 2   |     |                    |
| II  | II  | II  | II  | 至 自<br>寸一五<br>分五寸尺 |
| 34  | 16  | 49  | 26  |                    |
| I   | I   | I   | I   | 至 自<br>寸一六<br>分六寸尺 |
| 58  | 73  | 50  | 67  |                    |
| III | III |     | III | 至 自<br>寸一七<br>分七寸尺 |
| 6   | 11  |     | 7   |                    |

| 七年  |     | 六年  |     | 五年  |     | 四年  |     | 胸圖                 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|--------------------|
| 女   | 男   | 女   | 男   | 女   | 男   | 女   | 男   |                    |
| V   |     | V   |     | IV  |     | III | IV  | 至 自<br>寸一四<br>分四寸尺 |
| 1   |     | 1   |     | 3   |     | 8   | 2   |                    |
| III | V   | III | IV  | II  | III | I   | II  | 至 自<br>寸一五<br>分五寸尺 |
| 9   | 2   | 15  | 5   | 28  | 11  | 56  | 27  |                    |
| I   | III | I   | II  | I   | I   | II  | I   | 至 自<br>寸一六<br>分六寸尺 |
| 42  | 18  | 48  | 29  | 49  | 44  | 32  | 49  |                    |
| II  | I   | II  | I   | III | II  | IV  | III | 至 自<br>寸一七<br>分七寸尺 |
| 39  | 48  | 29  | 45  | 18  | 38  | 4   | 21  |                    |
| IV  | II  | IV  | III | IV  | IV  |     | IV  | 至 自<br>寸一八<br>分八寸尺 |
| 7   | 27  | 6   | 19  | 3   | 5   |     | 2   | 至 自<br>寸一九<br>分九寸尺 |
|     | IV  |     |     |     |     |     |     |                    |
|     | 5   |     |     |     |     |     |     |                    |

| 七年   |     |     |
|------|-----|-----|
| 女    | 男   | 女   |
|      |     |     |
|      |     |     |
|      |     |     |
|      |     |     |
|      | VI  | VII |
|      | 1   | 2   |
| VII  | VI  | IV  |
| 5    | 1   | 8   |
| V    | V   | III |
| 9    | 5   | 16  |
| III  | IV  | I   |
| 16   | 9   | 25  |
| I    | II  | II  |
| 25   | 22  | 23  |
| II   | I   | III |
| 23   | 24  | 16  |
| IV   | II  | V   |
| 12   | 22  | 6   |
| VI   | III | VI  |
| 7    | 12  | 3   |
| VIII | V   |     |
| 2    | 5   |     |
| IX   |     |     |
| 1    |     |     |

| 七年  |     | 六年  |     | 五年  |     | 四年  |     | 體重                 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|--------------------|
| 女   | 男   | 女   | 男   | 女   | 男   | 女   | 男   |                    |
|     |     |     |     |     |     | IV  | IV  | 至 自<br>寸二五<br>分五寸尺 |
|     |     |     |     |     |     | 2   | 2   |                    |
| V   |     | IV  | V   | III | IV  | II  | II  | 至 自<br>寸三三<br>分三寸尺 |
| 3   |     | 5   | 2   | 17  | 7   | 40  | 25  |                    |
| III | IV  | II  | III | I   | I   | I   | I   | 至 自<br>寸四四<br>分四寸尺 |
| 18  | 8   | 32  | 21  | 49  | 41  | 45  | 49  |                    |
| I   | II  | I   | I   | II  | II  | III | III | 至 自<br>寸五五<br>分五寸尺 |
| 41  | 36  | 42  | 45  | 27  | 37  | 12  | 23  |                    |
| II  | I   | III | II  | IV  | III |     | IV  | 至 自<br>寸六六<br>分六寸尺 |
| 31  | 39  | 18  | 25  | 6   | 11  |     | 2   |                    |
| IV  | III | V   | IV  |     | V   |     |     | 至 自<br>寸七五<br>分五寸尺 |
| 7   | 14  | 3   | 7   |     | 1   |     |     |                    |
|     | V   | VI  |     |     |     |     |     | 至 自<br>寸八五<br>分五寸尺 |
|     | 3   | 1   |     |     |     |     |     |                    |

| 七年  |     | 六年  |     |
|-----|-----|-----|-----|
| 女   | 男   | 女   | 男   |
|     |     |     |     |
| IV  |     | IV  |     |
| 1   |     | 1   |     |
| II  | III | II  | III |
| 19  | 9   | 24  | 9   |
| I   | I   | I   | I   |
| 66  | 70  | 66  | 70  |
| III | II  | III | II  |
| 14  | 20  | 9   | 19  |



# おちば

函根にて 久留島武彦

今朝不圖散りゆく木の葉の窓をうつな見て作りたる幼稚園向き唱歌三節御笑草迄お目  
にかけ候(編者宛書翰の末に)

(一) ハラ 〱 ハラ 〱 木の葉が落ちる

おちてはかさなりおちてはつもる

(二) そこにもこゝにもつもつた木の葉

また来る春までしづかにねむる

(三) ねむれよ木の葉よまた来る春に

若芽となるまで其のまゝ土に

『ボール・ドンビー』(ヂッケンス)(五)

|| 英文學に現はれたる子供(二十四) ||

岡田みつ

それからボールは、語を續けて、舞踏會のある  
事、姉も招待された事、姉が生徒等に美いと賞めら  
れるだらうといふ事、皆か自分に親切にして呉れ  
るから、自分も皆が好きだといふ事を話し、更に

又分析の事や、自分が異様だといふ事を述べて、ビブチンさんに如何したものだろうか。當世風でなく異様だといふのは、一體如何いふ意味だろうかと尋ねた。ビブチンさんは面倒だと思つて、一言に其様な事實はないと言ひ放つてしまつたが、ボールが少しも満足せず眞實<sup>ほんと</sup>の答を待つてゐるらしくその顔を見るので、ビブチンさんはどう／＼席を立つて窓から外面を見てゐた。

この學校に病人があると呼ばれて來る物靜かな藥劑師が、いつの間にか、ブリンバー夫人と一所に來てボールの臥床の傍に居た。如何にして二人が來たか何時ごろから來てゐたのだから、ボールは少しも知らなかつたが、兎に角二人を見ると、ボールは起き上つて、藥劑師の問に答へ、どうか姉さんに知らせて下さるな。是非姉さんを舞踏會に來させたいのですなど、元氣よく饒舌つた。それからボールは目を閉ぢて横になつてゐると、夢だか現だか、遠くでその藥劑師が「體質虛弱で、活

力がないのですな。」といつてゐるのが聞こえた。(ボールは何の事だらうと思つた。)  
「それに、あの少年は十七日に學校の人達に別れるのだと定め込んで居ますから、容體がわるくさへなくば望み通りにしてやつた方が宜う御座いませう。ドンビー君にはもう少し病狀が明瞭になつてから、御通知しませう。え、別に急に○○の心配はありません。(ボールは○○の處の言葉を聞き漏らした。)  
あの子は利撥ですが風變りの子で、なども聞こえた。風變りといふのはどういふのだらう。自分につき纏つてゐるらしいもので、皆の人にすぐ目に付くらしいがと、ボールは胸をどき／＼させながら獨り怪んでゐた。しかしどうしても解らないし又解らうと骨も折らないでゐるうちに、ビブチンさんが傍へ來て、(ビブチンさんは藥劑師と一所に出ていつたやうにも思つたが、やつぱり夢であつたかも知れない。急に藥罐<sup>くすりびん</sup>とコップが出て來て、ビブチンさんが藥を注いでくれた。其を飲むであとで

美味しいジュエリーを食べて、其から何でも気分がよいからと強つて頼んで、ビブチンさんに歸つてもらつたやうであつた。

翌朝は、小使か朝の鐘を鳴らさぬうちに來て、ボールに一日寝てゐるやうにとの命を傳へたのでボールは嬉しがつて床に入つてゐた。昨日のやうにビブチンさんも藥劑師も來て、遠くで相談をしてゐたがそれとも夢に其を見たのかも知れない。やかて、藥劑師は、博士と夫人と三人連で入つて來て、藥劑師が、

「先生、此の生徒さんは、暫らく學課を休ませて上げてよろしいでせう。休暇ももう直きですから」と言ふと。

「宜しいとも。」と博士は答へた。

藥劑師は、身を屈めて、ボールの眼を見たり、頭部に觸れたり、脈をとつたり、心臓を撫でたり、あんまり一心になつて診察するので、ボールは「どうも有りがたう御坐います。」と御禮をいつた。

「この子は少しも苦痛を訴へないです。」と博士がいふと、藥劑師が、

「苦痛を訴へるやうな性質ではありませんからな」と答へた。

「今朝は餘程よい方ですか。」

「え。餘程快い方で」と藥劑師は答へた。

其ときいてゐたボールは、藥劑師が博士に答へる答へ振りが、他事よそごとと考へながらしてゐるらしく思はれたので、何と思つて居るのだらうと、熟々じつとその顔を眺めたので、藥劑師は、急に氣が付いて、微笑して元氣よい素振りをした。

ボールは終日寝て、うと／＼夢を見てゐたが、三日目に床を離れて階下へいつて見た。すると廊下の大時計が、どうかしたと見えて、職人が踏臺に登つて、その面をはがして、中の機械をいぢくつて居る。之はボールには大珍事なので、早速階下はしごの最下の段に腰をかけて、職人の業わざを見てゐた。踏臺の上の職人は慇懃な男で、ボールを見て「今

日は」と挨拶をした。其を糸口にボールは話を始めた、自分は近來病氣だと答へ、それから時計や鐘の事をいろ／＼尋ね出して、教會堂の塔に、夜、人が番をしてゐて時刻が來ると鐘を撞くのかとか、人が死んだ時に撞く鐘は如何いふに鳴らすものなのだらうか。結婚式の時のと實際違ふのだから、それとも氣のせいで違つて聞こえるのだらうかなどと問ふた。此の職人は、昔の入相ひかりあひの鐘の話をよく知らぬらしいので、ボールの方からその事の起原を教へてやつた上、昔、アルフレッド王が、蠟燭を燃やして、時を計つたといふが、實際商賣的に考へたら、如何いふものだらうと質問をした。職人は今の世にそのやうな事が始まつたら、時計屋は商賣が立ち行くまいといつた。そんな工合で、ボールは時計がすつかり修繕が濟んで、元の見馴れた體裁になつて「坊ちゃんどうぞす」を繰り返すやうになるまで見物してゐた。職人は道具を片付けて、ボールに挨拶をして出ていつたが、戸口で學

校の給仕に、小聲で「風變りだな」といつて居つたのが、ボールの耳に入つた。

皆が氣の毒がるその風變りといふものは、如何いふものだらうとボールは考へた。今は學課もせず用事がないので、彼は尙のことその事を屢々考へた。しかし他にも考へる事が澤山にあつたのでボールは結局終日考へ暮して居るのであつた。第一に、姉さんが舞踏會に來るといふのが一つ、姉さんは、此處の人が自分を可愛がつて呉れてゐるのを見て、きつと喜ぶだらう。姉さんが目のあたり、皆が自分に親切なのを見れば、自分がこの學校に居るのを案じなくなるだらう。休み後に自分が歸村するとしても、姉さんは安心して自分をよこすにちがひないなど、思つた。

ボールが又學校へ戻つて來る！否／＼、實際ボールは日に何度となく、自分の部屋へいつては書物を集めて、細かい品物までを一纏めにして、家へ持つて行く支度をして居た。ボールの心には、

戻つて来る念は少しもなかつた。何をなし何と思ふにつけても、彼の心には歸つて來るといふ氣はなかつた。見馴れ、聞馴れた事々物に接することに、これにも御別れ、彼にも御別れといふ風に思つたので、さしてこうボールは、朝から晩まで考へる事ばかり多くあつたのである。

ボールは、ジョーンズの事、フヒーダー先生の事、生徒一同の事、ブリンバー博士、ブ夫人、ブ嬢の事、父の事、伯母の事を……皆考へた。その上、ボールは一日の中に必ず學校内の各室を訪ふた。校内の諸室へ自由に出入する事を許されてゐるので、教室へも、博士の書齋へも、ブ夫人、ブ嬢の居間へも、犬の處へも尋ねていつた。あらゆる物と仲よく別れやうと思ふので、凡ての物に平等に注意を拂つた。時には、室友の爲に紛失した本を探してやる事もあり、時間が迫つて困つてゐる生徒に字書を引いてやる事もあり、ブ夫人に絹糸をかけてあげたり、ブ嬢の机を片付けたり、偶には博士の書齋にまで

入つて博士の足許近くよつて、地球儀をそつと廻したりする事もあつた。

もう休暇も間近に迫つてゐるので、生徒等は必死に勉強してゐるのに、ボールは獨り特別待遇をうけて、人々の愛を一人で荷ふてゐた。ブ博士が殊にボールを大切に、ある食事の時に、ジョーンズといふ生徒が何の氣なしに、ボールを可愛想な子だといつたのを立腹して、食卓から退席を命じた事があつた。ボールは一寸顔を赤めたが、博士の處置を酷だと思つた。何故といふに、その前夜、ブ夫人が「ボールはだん／＼變になりますよ」といつたのに博士自身が同意したのを、ボールは確に他所ながら聞いたのであるから。ボールは、かう瘦せてゐて、體重が軽く、ぢきに疲れて、其處等に仆れたくなるのが、風變りといふものに相違あるまいと鑑定した。

舞踏會の日になつた。しかし食事の時には其夜の催しについては誰も態と何の話も爲なかつた。

たゞしボールは、家の中をぶら／＼歩いてゐる中に、見馴れぬ腰掛や蠟燭立を見付けたり、客間の外に、緑色の被ひのかゝつてゐる立琴があるのに氣がついた。生徒の室では白チョッキに白ネクタイの人があちにもこちにも出來た。ボールは、氣分が悪くて、長く立つて居られないので、手早く衣服を換へて、客間へ下りていつて見た。すると、博士が禮装をして、室内を歩いてゐたがその様子が一二人訪問者があるかもしれない程の無造作の態度であつた。やがてブ夫人も令嬢も美しく装ふて出て來られた。夫人の裳がぱつと四方に擴がつてゐるので、ボールはその周圍を一廻するのは大運動になると思つた。次に現はれたのがツーツとフヒーター先生で、二人とも他處から來たかのやうに、手に椅子を持つて居た。取次が博士に、その名を通じると、博士は「これはよく御出下すつた。」といつて頗る歡待する風であつた。ツーツは目も眩いやうに寶石を付けてゐて、それが御得意

だと思へて、博士に握手をし、ブ夫人と令嬢に御辭儀をしてから、ボールを小傍へ連れていつて「之はどうだい。何と思ふかね。」と尋ねた。その内に生徒等が皆めかし立て、他處行の帽子を手にしてすぐ取次の案内に連れて入つて來たので、愈舞踏の始まりが近くなつた。

ボールは、長椅子の隅に陣取つて、此光景を眺めて居たがフロレンスが來た頃だと席を迂り下りて階下へいつた。彼は二週間程も、姉に逢はずに居たのであるから今フロレンスが、あつさりした舞踏服に、花を手にして入つて來て自分を抱き占めやうと跪いて呉れる時には、一生離れたくないやうの氣がして姉の美しい顔を飽かず眺め入つて居た。

「ボ、姉さん、どうしたの。」とボールは姉の目に涙が見えたと思つて尋ねた。

「何でもないので、何でもないので。」とフロレンスが答へた。

ボールは指で姉の頬を撫でると、果して涙であつたので、

ボ「だつて、姉さん！」

「一所に御うちへいつて、私看病して上げるワ。」とフロレンスがいう。

ボ「看病するの。」とボールは繰り返して、看病が何の爲とも又何故姉が顔を一寸そむけて、其かう急ににこ／＼して見せたのだから解らなかつた。

ボ「姉さん。」とフロレンスの髪毛を一本引張りながら、ボールは、

ボ「僕は他と違つてゐますか？ 姉さんどう思ひますと。」訊いた。フロレンスは笑つて、弟を可愛いがりながら、

フ「そんな事はない。」といつた。

ボ「でも皆なが左様いふのですよ。で、僕はそれがどういふのだから知りたいと思つて。」

丁度その時に、玄關に案内を乞ふ音がして、新來の客がありさうなので、此話は途切れてしまつ

た。

ボールは、誰も長椅子の隅の居心地のよい席を占領するものがないのが變だと思つた。又自分が姉さんの舞踏をするのを見たいと思ふと、誰も自分の前に立ち塞がつて邪魔をするものがないのも變だと思つた。皆が親切で、知らぬお客までが、時々傍へ来て、病氣の見舞をいつてくれたり、疲れはせぬかとか、頭痛がするかとかいつて尋ねて呉れた。ボールは、ほんとに嬉しいと思ひながら、その隅の席により／＼の枕に身をもたらせて、眺めて居ると。姉さんは一鎖り舞踏がすむときつと傍へ来て呉れた。フロレンスは舞踏するよりも弟の傍に居たいと思つたが、ボールは舞踏して呉れ／＼と勧めてはやらせてゐた。見物してゐるボールは皆が姉を賞めるし、ことに、姉がその晩の花であつたので、得意さを満面に現はしてゐた。

舞踏が一寸途切れた時に、お客のうちに一貴婦人が、ボールに「あなた音楽が御好きらしいのです

ね」と云つたので、ボールは「え、大好きです。

貴女も御好きならば、僕の姉さんの歌ふのを御聞きなされるといふ。」といった。貴婦人が早速是非聞きたいものだと言ひ出した。

フロレンスは、大勢の人の前で唱へと頼まれて始めは屹驚りして、しきりに斷つて居たが、ボールが近くに呼び寄せて「ね、姉さん、唱つて頂戴。僕が頼むのだからね。」といったので、さうさとビアーの前へいつて歌ひ始めた。それがボールによく見えるやうにと人が皆前を明けてくれたから、ボールはフロレンスの若くて美しくて優しいのを見、その飾らぬ無邪氣の可愛い、聲をきいて、胸が一杯になつて顔をそ向けて涙を隠した。而して皆がフロレンスを可愛がるといつたら！ボールは、豫めさうだろうとは知つてゐたが、「ドンビーの姉さん」が「何ていふ落付きのある優しい少女だらう」「怜悧で藝があつて」などいふ讃辭がボールの耳元に絶えず漂よつて來てボールは言ひ

しらぬ慰めを得た。

それからボールが暇を告げる時になつた。その時こそ一座色めき渡つて、皆が懇ろにボールに挨拶をした。

「先生さやうなら。」とボールはグリーンバー博士に手を出した。

「あゝさやうなら。」と博士は答へた。

「いろいろありがたう御座いました。どうか皆に犬をよく世話をするやうに仰つて下さい。」と博士の顔が無邪氣に見上げて、ボールがいつた。

その犬といふのは今までボール以外に誰もかつてやつた事のない獣なのであつたが、博士は、ボールの留守中は、きつとよく世話をさせると約束をした。それで、ボールは、又改めて御禮をいつて暇乞をし、夫からブ夫人とブ嬢に向つて、心を籠めた挨拶をした。

ブ嬢は、ボールの雙の手をとつて、

「ドンビーさんや。あなたは、私の大好ききの生徒



でしたよ。御機嫌よくね。」としみじみいつて呉れたので、ボールは、こんな情のある人とも知らないでゐたと思つた。

「ドンビーが歸るんだ。」ドンビーが歸るところだよ」といふ囁きが、口々に傳はつて生徒一同ボールとフローレンスとのあとにいて階下へいつた（ブリンバー家の人は勿論の事）こんな光榮は、此校あつて以來、どんな人の退學する時でもなかつた事だと、フヒーダー先生はいつた。召使共迄がドンビーさんの御歸りだと搖めいた。

生徒等はボールに別れを告げるとて、喧しく騒いだ。帽子を振るもの、階子段で押しあふもの、「ドンビー君僕を忘れないでくれたまい。」と怒鳴るものもあつた。ボールは姉に外套は着させてもらいながら姉に小聲で、

「皆のあの騒ぎがきこえて？　とても忘れられないね。嬉しいではありませんか。姉さんも嬉しいでせう。」といつて、如何にも喜ばしさうな目

をしてゐた。

最後の別れにと、ボールは見返つて一同の顔を眺めた。而して今更のやうに、その大勢なのと、その元氣のよいのと、劇場の見物席のやうに顔の上に顔が重なつてゐるのに驚いた。が次に忽ち暗い馬車の中の人となつて、姉にしつかり抱きついてゐた。それから後は、ボールはブリンリバー學校の事を思ひ出す時は、いつも此最後の有様が目に浮ぶのであつた。

その翌日とその以後の事に對してはボールはたい混雜した記憶をもつてゐた。何故實家へ歸らないで、毎日／＼ビブチンさんの宅にゐるのだから、何故床に就いてゐて、姉さんが傍にゐるのだから、室に來てゐるのは御父さんなのか影法師なのだから解らなかつた。而して醫師が誰かの事をいつて「病人が思ひ定めた時よりも早く他へ移すと、身體は弱つてゐる反對に思ひ込んだ一念は強のですから、却て其が爲に衰弱して果てるでせう。」と言つ

たらしいが果してさうだつたかそれも解らなかつた。又自分が姉に向つて「うちへ連れていつてよ。

僕の傍を離れてはいや。」と言つたやうにも思はれた。しかし確に記憶してゐた事は實家へ着いて目馴れた階子段を抱いて連れて行かれた時であつた。その前に何時間か揺れる馬車の中に寐てゐると傍に姉さんが居て、ビブチンさんが對<sup>むか</sup>ひ側に居たのも解つてゐた。ボールは自分の臥床を記憶してゐた。伯母さんも居た。スザン(侍女)も居たが、も一つ何だか別に居た氣がしたので、

「僕、姉さんに用があるの。一寸、姉さんだけに話したい事がある。」

といふと、フロレンスが側に身を屈めて、餘の人は遠くに立つてゐた。

「姉さん、僕が馬車から下された時に、玄關<sup>い</sup>に在<sup>あ</sup>したのは、御父さんだつて。」

「え。」

「御父さんは僕を見て、泣いて御部屋へ御かへり

になつたのではないの。」

フロレンスは首を振つてボールの頬に顔をすりよせた。

「さう、そんならいゝけれど。僕は御父さんが泣いていらつしやるのだと思ひましたよ。他の人に僕がそんな事をいつたなどゝいつてはいけませんよ。」(續く)

### ○問題を送られ度し

本誌は特に質問欄を設けて多數の質疑に解答を與へ得る力はありません。しかし、實際保育上諸君の最も重要困難なりと問題を送らるゝならば共に研究する熱心を有して居ります。又多少其の便宜を有して居ります。願はくは、本誌を共同研究の機關として續々問題を送られたし、

## 雜 錄

### ○京阪神三市聯合保育會

第二十一回京阪神三市聯合保育會は十一月八日午前より、京都市都文尋常小學校に於て開催せられた。例によつて最も盛會を極め、京都文科大學教授文學博士小西重直氏の講話の外左の協議、研究及會員の十分間談話あり、又各市保育會より新遊戲唱歌の提出交換あり、頗る有益なる會合であつた。

#### 協議題

一、從來本會ヨリ建議セシ事項ニ對シ其ノ筋ニ實行ヲ促スノ件（神戸市保育會提出）

#### 研究問題

一、時局ニ對シ保育上如何ナル御考案アリヤ承ハリタシ（大阪市保育會提出）

二、幼稚園ニ於ケル優良ナル感情ノ涵養方法ヲ承ハリタシ（神戸市保育會提出）

三、園児ノ感覺練習ニツキテ適切ナル方法ヲ承ハリタシ（京都市保育會提出）

四、各園ニ於ケル園外保育ノ實際ヲ承ハリタシ  
（イ）、幼兒引卒ノ途中市内電車利用ノ場合如何ナル方法ニヨラル、カ

（ロ）、保育ノ方法

（ハ）、給與品ノ有無其ノ種類及利害關係

（ニ）、費用徴收ノ有無

（大阪市保育會提出）

### ○静岡縣保育會總會

静岡縣保育會總會は毎年一回、縣内幼稚園所在地に於て巡回的に開催せられる規定になつて居て、本年は十一月一日午前午後に涉り、島田町女子尋常高等小學校に於て開催せられた。新會長静岡縣女子師範學校長津久井德次郎氏の挨拶の後、左の研究問題につき、各自の経験を語り、午後倉橋本會幹事の保育に關する講演があつた。出席會員全縣に涉り島田町長馬場晴利氏、志太郡視學山内百平氏其他小學校長及び有志諸氏の出席あり最も盛會であつた。

#### 研究問題

一、内氣ナル幼兒ノ取扱ヒ方如何、（森町、英和兩幼稚園提出）

二、我儘ナル幼兒ノ取扱ヒ方如何、（見付幼稚園提出）

三、園児衛生上寒季開誘室内ヲ保温スルノ必要アリヤ、若シアリトセバ適當ナル該裝置如何、（掛川幼稚園）

四、各園ニテ自由遊戲ノ際ニ於ケル自然ニアラハル、遊戲ノ種類ヲ承ハリタシ、（静岡幼稚園提出）

五、表類其他研究調查物御示シ願タシ、（島田幼稚園提出）

### ○東京市保育研究會例會

東京市保育研究會第一回例會は十一月廿五日午後一時より麹町小學校に於て左の通り開催せられた。

一、保育につきて

一、京阪神幼稚園視察談

倉橋 惣 三君  
土川 五 郎君

# フレibel自傳

(第十二回)

(マイニンゲン大公に宛てたる書翰)

倉橋惣三譯

八十四、完體としての人類

古語教授の最上の方法に對する満足な判斷のよすがを得べく私はその頃イベルドンに滞在してゐた若い獨逸人に就て希臘語と羅典語とを學びました。而かも同時に一面に於て私は實際教授に當つて逢遭する重要な諸點を省察して自分自身の發明に係る方法を構成しつゝありました。

けれども普通教育法及び人類教養の一部分として古語の教授が充分に行はれてゐないといふこと、殊にそれが理解的な必須的な教育法として將又イベルドンに於ける教育教授が基く所の諸原理の不定動搖を超越する博物學の考察の缺如といふことに關聯してゐましたので私は私の生徒をその

親の家に連れ戻るばかりでなく私自身も教育者として是非とも必要であると感附いた自然科學の智識を相應に收めるために何處か獨逸の大學で研究して自身に備へをなすべく現在從事して居る教育事務を見捨て、了はうと決心しました。

一八一〇年私はイベルドンを去つてベルン、シヤツフハウゼン、スツットガルトを経てフランクフルトへ歸着しました。

私はすぐにも大學へ行くつもりでありましたが翌年の七月まで今までの位置に止まつてゐなければならぬことになりました。

片々たる教育事務に取圍まれてゐるのは氣の重くなることでした、それ故私が遂に私の位置から

自由に私自身を振り離すことが出来るやうになつた時極度の喜悅を感じました。

一八一一年の七月の初頃私はグッチンゲンへ行きました、學期中途ではありましたが私は速座に出かけたのであります、何故ならば私は私の内の生活を外的生活と調和させ私の思想を私の行動と一致させるべき手心が分るまでには數ヶ月を要するであらうと考へたからであります。而して私が私の心の内に平安を得又私が私に取つて大切な内的生活と外的生活との結合並びに目的と生涯と方法との間に横る等しき必要の認めらるゝ調和に達するまでには實際數ヶ月を要したのであります、完體としての人類、偉大なる渾一としての人類は今や私の潑刺たる思想となりました、私のこの概念を常に心に浮べて居りました。

私は私の小さな内的世界を私以外の大きな世界とにその實證を追求しました。私は多くの苦闘を経てそれを獲やうと望みました、而してそれを立

派に發表しやうと思ひました、斯くて私は我が地球に於ける人類の始めての出現、始めて人類を迎へたる地及び人類の始めての表現即言語といふものに思ひ至りました。

#### 八十五、ヘブライ語とアラビア語

語學的研究、語學の習得、哲學等は今や私の研鑽の對象となりました。東洋語學の研究は私の調査が私を誘つて行つた中心であり泉源であるやうに私には見えましたが、而して私は直ちに東洋語學研究の第一着としてヘブライ語とアラビヤ語とを始めました。私はヘブライ語とアラビヤ語によつて他の亞細亞系の語學殊に印度語と波斯語とに達することが出来るやうに臆氣に考へてゐたのであります。

私は是等の語學の研究に就て私の聞いたことによつて、それからその少年期に於て——即ち波斯人と獨逸人との間に關係の存することを認めることによつて力強く刺戟され惹き付けられました。

希臘語も亦その内的に充實して居ること、組織的なること、正確なることのために特殊な意味で私を惹き付けました。

私のすべての時間とエネルギーとはヘブライ語とアラビヤ語とのために献げられました。然るに私は真正正確の熱心と自分を持すること嚴であつたにも拘らずヘブライ語の研究を止めて了ひました、といふのは自分の心に適つた語學を眺める仕方と初歩の教授が與へらるゝ仕方との間に私の越えることの出来ない罅裂がありました。

語學が私に提供された形に於て私はそれを活學問とするよしがありませんでした、而かもそれにも拘らず私が教育ある人々によつて是等の研究、殊に印度語及び波斯語の研究が實際に於ては私の狙つてゐた目標とは違つてゐるといふことを確められなかつたならば何物も私を私の語學的研究から引き離すことは不可能であつたであります。

ヘブライ語も亦顧られなくなりました。けれど

も一方に於て希臘語はすっかり私を魅了してしまひました、而して殆んど私の全時間と全勢力とは遂に最もよき本の助けを以て希臘語の研究に費されました。

私は今や自由で幸福で精神的にも肉體的にも健全で活氣に充ち満ちて居りました、而して私は一度微恙のために二三週間私の室に籠つてゐた外は油斷なく勉強を續けて心内にも心外にも平安を得ました。終日一人で勉強した後落日から親しげな光の挨拶を受けるために夕方遅くなつて散歩をするのが常でありました。

私の體格に劣らぬやうに私の心にも元氣を附けやうと思つて私は夜半近くなるまでゲツチンゲンを取圍んで居る景色のいゝ近隣を歩くことが間々ありました。

さら／＼と輝く星空は私の思想とよく調和しました、而してこの頃天に現れた新しいものはひとく私を驚異せしめました。私は極く少しゝか星學

を知りませんでした、それですから大きな彗星を期待するといふことは私には全く分つてゐませんでした。それ故私は自分でその彗星を見附け出した譯になります、而してこれが特別の興味の源泉であつたのであります。

この彗星は靜かな夜毎に私の思索を吸ひ寄せました、而してすべてを包み廣くひろがつてゐる上なる法規と秩序の世界を考へることが夜毎のそゝろ歩きの内に特殊な力を以て私の心の内に發達して來ました。

私は屢々是等の默想の結果を速かに書き記すべく家路を急ぎました。而してそれから暫時眠りに就いて私の研究を始めるべく再び起上るのでありました。

#### 八十六、恩人たる二人の叔母

斯くてその年の夏季の後半も瞬く間に過ぎ去り聖ミケル祭（九月二十九日）が來ました。

私の内的生活の開展はしばらくすると知らず識

らずの間に語學の研究から少しい私を引き離して行きました、而して自然物の底に横つて居る渾一に向つて私を導いて行きました。

私の初期の計畫は漸々最初の形式及び要素に於ける自然を研究すべく再びその主張を繰返して來ました。この計畫のために大學にもつと止まつてゐる必要がありました。私の手許に残つてゐた學費は非常に乏しいものとなつてゐました。

自分の一本立ちの力にたよる他何物もたよりとするものはありませんでしたので私は最初私の力を或る實際的事柄——文學的の著作といふやうなものに傾けて私の目的を達しやうと思ひました、私は殆んどその準備に取掛りました、然るに丁度その時豫期しなかつた遺産が私の全境遇を變へてしましました。

これまで私は母方の一人の叔母を有つて居りました、この叔母は私の郷里で健やかな身體を保つて誰に氣兼ねもせず安穩に暮してゐたのであり

ます。この叔母が突然死去しましたので思ひも掛けず私は私の熱望してゐた研究を續行すべき學費を得ることが出来たのであります。

この出来事は甚だ強い印銘を私に與へました、何故ならばこの叔母は私が教育者としての生涯を始める動機となつたクロス、ミルホー行きを可能ならしめた遺産を私に残して死んだ叔母の姉妹であるからであります、而して今や再び愛する人の死が教育者としての私の生涯に必要な高き教養を得ることを可能ならしめたのであります。

母の兄弟姉妹は非常に深く私の母——ずつと以前に早くもこの世を去れる——を愛しました、而して母亡き後はその子なる私に向つてその愛を掛けてくれたのであります。

死によつてより高き生活とより高き天職とを私に與へてくれたこの二人の愛する叔母が私の仕事と私の生涯とによつて永久に生命あらんことを。

八十七、ハルツの山間

私の境遇は今や甚だ愉快なものとなりました、而して私は未だ嘗つて感じたことのない慰藉的な愉快な勢力を感じました。

秋季休暇にも睦じい家庭が私を待つて居りました。屢々私の生活のために盡してくれた田舎に居る僧侶の兄の外に私はもう一人兄を持つて居りました。この兄はハルツの山間なるオステルローデの町で成功した商人として又オステルローデの市民として十年以上もその土地に住つて居りました平和な控え目な幸福な家族の主人で、五人許りの子供の父でありました。

私の教育者としての前々からの生活と努力とは既に私をこの家族に接觸せしめてゐました。何故ならば兄はその子供のために苟くもせざる教師であり教育者でありましたので私は何でも兄の要求と合致するものを見附けると直ぐそれを兄に知らせてやることを怠りませんでした。

私は大學の規則がその忙しい學業から私を解放



してくる休暇の全部をこの智識的な商人の家庭の平和な生氣に充ちた家族の間に過しました。

この訪問が私の總體の發達の上から言つて私に非常に役立つたといふことは勿論であります、而して私はたいそのことのために今でも思出して感謝の念に耐えません。

私は今や私の學生生活に歸りました。物理學、化學、礦物學及び一般に博物學と稱するものは私の主なる研究問題でありました。

すべてのものを包括しそれ自身に於て條件附けられ欠くべからざらしめらるゝ内的の法則と秩序は今や明かにそれ自身を私に向つて現し始めました、而して私は自然界にも人生にも、その數種の表現によつて複雑差等に大なる相違があるとはいへ、この秩序の現れてゐないものを見ることは出來ませんでした。

丁度この頃フランス及びイギリスの哲學者の偉大なる諸發見が一般に知られるやうになり、それ

によつて多種多様な外的世界が理解的な外的渾一を形造るやうに見えました。而して是等の本質的に條件附けられた根本的の諸法則をそれらの最も正確な表現に於て又それらの相互交易及び結合に於て研究したり理解したりすることが出来るやうに重量と數との用語を以て現さうとする獨逸及び瑞典の哲學者の骨折は私の憧憬と努力とに丁度適合しました。

#### 八十八、ワイス教授の講義

自然科學及び自然研究は活氣ある現象の截然たる平面に屬すると同時に人類の進展、教養、教育の法則と進歩の跡とを明瞭にし定義することに於て役立つ所の基礎であり親石であるといふやうに私には思はれました。

斯る研究が全く私を惹き付け、私の全エネルギーを働かし而して私を最も忙しくさせてゐたといふことに不思議はありません。

私は能ふかぎりの熱心を以て化學と物理學とを

研究しました、けれども物理の教授は化學の教授程充分に私を満足させてくれませんでした。現半學年に於て理論的な立場から考察してゐたことを次の半學年に於て私は實際生活の要求として實地に研究して見やうと心掛けました。乃で私は有機化學と地質學とに移つて行きました。

私は私が自然に於て認めることの出來た法則を人の生活と行動とに試みやうと望みました。それ故に私はそれまでの研究に歴史と政治學と經濟學とを附け加へました、是等の實際的智識は人の所有し得る最も價值ある富は教養せる心及びその自然の條件より生ずる事柄の適當な練習の中に横るといふ大眞理を明かに私に思ひ返させました。

私は更に富といふものは經濟的な使用によつて貯蓄せらるゝばかりでなく生産力からも生ぜしむることが出来ること及びその產出品はすべての中最も價值あるものなることを知りました、この產出品は高尚な觀念若しくは驚嘆すべき思想の結果

であり表現であること及び最後に政治學そのものゝ煎ずる所自然及び人生の必要上から心靈と意志の自由に人を向上せしむる手段に過ぎないといふことを知りました。

私は大學で博物學の講義を聞いて大なる便益を受けてゐる間に結晶學、礦物學及び物理學の固定した形式に關して與へられた意見に同意することが出來ませんでした。

ベルリンのワイス教授の博物學講義の噂を聞いて私は同教授に就いたならば正しい意見を得ることが出来るであらうと感じました、而して私の學費はゲッテンゲンにもう一學期まる全部止まることを許しませんでしたし又一方ベルリンへ行つたら教へながらも彼地で學生生活を送れやうと考へましたので私はワイス教授の下で礦物學、地質學、結晶學を研究したり物理學と物理的法則とを調べやうと思つて次の冬の學期の始にベルリンへ行かうと決心しました。

八十九、個的存在の渾一

オステルローデに兄と共に二三週間止まつた後一八一二年の十月私はベルリンへ行きました。

私の期待してゐた講義は思ひ通りに私の心靈の要求を叶へてくれました、而して前にも増して熱烈に宇宙の全進展の可證的な内的結合の確實性を私の内に呼び覺してくれました。

私は又人類がこの宇宙の絶對的渾一並びにその渾一の内にあつて常に己を開展しつゝある事物、外貌の不同を意識し得るやうになるものであるといふことを知りました、而してそれから人の生活、仕事、思想、感情、位置に於ける限りなく異つた現象もすべてその人の個的存在の渾一に於て約められるといふことを意識しはつきりその事を心に思ひ浮べた時私はもう一度教育問題に私の思想を傾けたいと感じました。

私は大學で充分研究して行くことの出来るやうに或る評判のいい私立學校で教師をして居りました。

た、この學校での私の仕事は滯在中私に充分な衣食を附與した外何等積極的の効果を私の生活の企圖に與へませんでした、何故ならば私はこの教育課程に高き靈智、高尚な目的、渾一といふやうなものをどれ一つとして見出すことは出来ませんでした、不祥なる一八一三年は來ました、すべての人々は武器を握り互に勵まし會ひ祖國の難を救ふべく警備に就きました。

私も亦故郷を有つて居りました、眞實生れた土地を有つてゐたのです、私はそれを母國と呼びたのです、けれども私は祖國を持つてゐるとは感じられませんでした（譯者註、フレーベルは祖國を以て獨逸聯邦全部を現し母國を以てフレーベルの故國を現すものゝ如し）。私の故國では私に援助を同附しませんでした、私はプロシヤ人ではありませんでした。それで（ベルリンでは）誰も彼も皆武器を執つて起つたといふことは引込思案の生活をしてゐる私に些の感動をも與へませんでした。

#### 九十、銃剣を執りし理由

私を獨逸軍隊に投せしめたのは全く他の感情であつたのであります、私の熱誠は或は欠けてゐたかも知れませんが、しかし私の決意は岩の如く極めて強固でありました。その感情といふのは私が常に心の内に高き嚴かな理想として懷いてゐた純粹な獨逸友邦の意識でありました、獨逸全國に遍く充分に自由に感ぜらるゝことを切に希望してゐた所の感情でありました。その上教育者としての私の職業に對して私の持してゐた忠實がこの事に關しての私の行動に影響しました。

私に父國を有するといふ感情がなかつたにもせよ、私は後年私の教育を受けるべき少年達が父國を有つことを認めなければなりません、而してその父國は今や防護を要するの秋です、而かも少年達は未だ防護の任に當ることは不可能であるのです、この事と思はねばなりません。

武器を執つて起ち得べき若者が要求されながら

も彼の血を以て、生命を賭して防護することを拒絶した國の少年達を救へるといふことを想像することは出来ませんが、戰鬪を恐れて引込んでゐて恥ともしなかつた者が後年赤面しないで生活して行くことを想像することは出来ませんが、又斯る人間が嘲罵と冷笑に彼自身を曝すことなくしてその生徒に高尚な行爲を要求したり、犠牲無私の事業をなすべく獎勵したりすることは出来ません。これが私を動かした第二の主なる理由であつたのであります。

第三にこの召集は共に住へる人々、私の生存してゐる時代、私の生存してゐる土地の一般の要求のあらはれであるやうに私には見えたのです、而してこの一般的要求に對して戰鬪を斥け一般に降り掛つて来る危險を防がずに傍觀してゐるといふことは意義のないことであると同時に男らしくないことであると感じました。

この確信の前にはすべての願慮——斯る奮闘的

な生活に對しては餘りに華奢に出来上つてゐる自分の體格の顧慮さへも屏息してしまひました。

九十一、エルベ河畔の乾杯

私は同僚としてルッソーウェルスを選びました、而して一八一三年の復活祭季節に私はライブチヒのルッソー軍團の歩兵部隊に入隊すべく途中ドレスデンに到着しました。私は自己集中の生活を送つてゐましたので自然性質は引込思案となり、自分が正式に入學した生徒であるにも拘らず他の生徒と昵近にならず彼等の中にお仲間を得ることは出来ませんでした。それでドレスデンで會つた勇しい同僚は大抵私と同じくベルリンの學生でありましたが私は彼等の中に一人も知人を見出ませんでした。

私は軍隊で極く僅かの友を作つただけです、而してその友といふのも私が軍隊に入つた最初の日に知合になつたのです。第一日の朝ドレスデンから行軍して駐軍した時に軍曹が私にチューリング

ン人としてエルフルトから來た同僚、つまり同郷人を紹介してくれました。その人はランゲタールでありました。二人の友誼は斯くも偶然に始められたものではありますが、それは長く長く交際を結ぶ緒であつたのであります。

我軍の最初の日の行軍はマイセンまで、その日は其處に駐屯しました、私達は行軍してゐる間春らしい長閑な天氣でありましたが私達の駐軍は晝間にも増して美しい夜によつて祝福されました、氣が附いてみると軍團の大學生は皆同じ衝動に驅られてエルベ河の岸邊や酒場の近傍の打開いた場所に集合して居りました、而して古いマイセンの酒を抜いて互に契りを固くしました。

私達二十人許の強者は長いテーブルを圍んで大きな塊をなし互に友誼のために祝盃を舉げ始めました、此處でランゲタールは私にベルリンの彼の學友を紹介してくれました、それはマークから來てゐる若い神學生でミッテ・ド・ドルフといふ人でし

た、美しき春の夜の夜半まで楽しく語り合ひ翌朝は私達は相伴うてマイセンの莊麗な大會堂へ行つてみました。

斯くて私達三人はより高き生活のためにする共通の戦闘に於て最初から固い契りを結びました、而して私達は外部の結合に於て當時と同じやうな緊密な關係を結んでゐないにもせよ、その時から十五年も過ぎた今に於て尙私達は内的生活並びに自己修養に對する努力を追求することに於て決して友誼を失はないのであります。

#### 九十二、陣中の讀書

ランゲタールもミツデレドルフも同じ部隊の中にパウエルといふ今一人の友を有つて居りました、私は彼とも多分マイセンで知り合ひになつたと思ひますがパウエルと私とが今に變らぬ友誼を結ぶやうになつたのは其後ハベルベルグに於ていありました。

私達は外的生活を共にしない時に於ても至高至

善なるものを追求する努力に於ては常に一體となつて居りました。

パウエルは我が部隊の中に私達の狭いサークル一群をまとめて行きました。

私は以前の生活の仕方に裏切るやうなことはしませんでした、而して私が新しい軍隊生活に對して懷いた考へ方で考へました。

私の主なる注意は常に召集（私はその時召集されてゐたのです）に向つて私自身を教育するといふことにありました、それですから私は先づ第一に訓練と軍務の諸部分の内的の必要と關係を見出さうと企てました。私はそれまでに全然軍隊教育を受けたことはありませんでしたが私の數學と生理學の智識のお蔭で左したる困難をも感ぜずに立派に私の企劃を完ふしました、それ故私は骨折るに足りぬと高を括つてゐた連中の上に屢々落ちたお小言を頂戴せずに済みました。

斯くて休戦の期間の後に私達が絶えず訓練を受

けてゐる時に私は私達の施されてゐる軍隊教育の行動が規則正しく明確で四角四面であるといふことに混りッ氣のない愉快を覚えました。軍隊教育を深く立入つて調べて見るとその認められたる必要の下に自由のあることが分つて來ました。

先に一寸述べたハベルベルクに於ける我が軍團の長逗留の間に私は私に許されたる時間の全部を大氣に接し自然に親しむことに費し私の内的生活を強めました、その頃丁度耽讀してゐたゲー、フォルステルの「ラインランドの旅」は私の感覺を新に自然の美しさの知覺にまで開いてくれました、私達友達同志は努めて互に會ふ機會を取りました、暫時すると私達は三人一つ所に宿泊して容易く互に會ふことが出来るやうにしようとして運動し始めました。

戦争の倉卒な淡泊な生活に於て人々は種々な形貌に彼等を現して彼等の行爲、彼等の活動的な仕事而して彼等の多くが有する高き天職に關する私

の考察の特殊な對稱となりました。人及びその教育といふことは散歩の際及び屋外生活に於て常に私達の頭の中にあつた問題であります。私が私達の中での最少年者ミッデンドルフと論を戦はしたのは殊にこの種の問題でありました。

#### 九十三、戦争より得たる便益

私は露營生活を好みました、何故ならばそれは歴史の多くを私に明かにしてくれました、而して又屢々續く烈しい勞働的な行軍と機動演習を通して身心の相互關係を私に教へてくれたからであります、それは戰時にあつて個人といふものが如何に尠く彼自身に屬するかといふことを示してくれました、個人は大なる全體の原子に過ぎません、而して原子としてのみ個人は考へられなければなりません。

我が軍團が實戰場から遠退いたので、機動演習によつて烈しい勞働が原因され私達が緩慢な戰報を耳にしてゐながらも私達は私達の軍隊生活とい

ふものを——私は少くも之れまで軍隊生活を送つてゐたつもりです——夢のやうなものとして考へることになりました。時々ライブチヒやダレンブルクやブレーメンやベルリンに於て私達は呼び覺まされたやうに覺えましたけれども直きに再び弱々しい眠りに沈んでしまひました。

大戦役の片割れとしての自分の地位を握むことが出来ないといふこと、私達の機動演習の理由と目的とを充分に説明せられないといふことは私に取つては特に意氣を沮喪せしめることでありました、これは私に就ていふことで他の人々は私よりもよく明かに知つて居たのかも知れません。

私は戦争から一つの明かな便益を得ました、實際の軍隊生活を送つてゐる内に私は獨逸の國土と獨逸の國民との最高の利益に熱心になりました、私の努力はこの意味に於て國民的になりかけて來ました。而して大體に於て私の勞役が許す範圍に於て私は私の未來の地位を常に考へて居りました。

た、小競合に参加してゐる場合にも何か自分の未來の仕事に役に立ちさうな經驗を集めることが出來ました。

我が軍團はマークを過ぎて進軍しました、而して八月の下旬にブリーグニッツ、メクレンブルグ、ブレーメンとハンブルグの諸地方及びホルスタインを過ぎて一八一三年の最初の日にラインに到着しました。

#### 九十四、鑛物博物館の助手

平和が（一八一四年五月三十日）私達の巴里を見ることを妨げました、而して私達は軍團が解散するまで和蘭に止まつて居りました。遂に一八一四年の七月に軍務に服することを希望せぬ向きは故郷へ歸り、元の職業に立ち返ることを許されました。

プロシヤ軍の軍團へ入隊したので私は或る善き友の盡力によつてプロシヤ政府の或る官職に就く豫約を有つてゐました——即ちワイスの下に就て



ベルリンの鑛物學博物館の助手の官職に就くことになつてゐたのであります、それで私は私に運命づけられた仕事の第二の場所として私の歩みを其の地に向けました。

私はラインとマインと私の故郷とへ行つて見たいと思ひました、乃で私はデュッセルドルフを過ぎてリユーネンへ戻り其處からマインツ、フランクフルト及びルードルスタットを経てベルリンへ行きました、斯くて私は兎まれ角まれ私の力によつて生活の渾一及び調和に向つて執念き內的の戰鬥をなしつゝこの全戰役を通じて來て了ひました、けれども私は外的に意義のある追憶に價ひする何物をも軍隊生活から得ることは出来ませんでした。私は軍隊及び好戰の生涯に残すに不満足の感情の總計を以てしました。

渾一、調和、內的平和に對する私の憧憬は非常に力強いものでありましたのでそれは知らず識らずの間に豪徴的な形と姿にそれ自身を現すに至り

ました。

憧憬と不安の小歇みなき解き難き苦惱の状態を以て私は故郷へ歸る途次、<sup>みちすがら</sup>多くの美しき土地や多くの花園を過ぎてゆきました。しかし何處を見ても私の心は引き立ちませんでした。

斯うした氣分で私にエフ——へ着きました、而してかなり大きな手際よく植え並べられた花壇へ入つてみました、私は花壇に咲き誇る生々した植物や新鮮な赤い花のすべてを眺め渡しました。けれども孰れ一つとして私の心を惹いたものはありませんでした。

私はその花壇の中なるさまざまの美しき花を凝然と見て行く内に不圖百合の花のないことに氣が附きました。私は花壇の持主に此處には百合の花はないのですかと訊きますと彼は靜かにありませんと答へました、私が驚いた様子を見せると持主は前と同じやうに靜かにこれまで誰も百合の花のないといふことに氣の附いたものはありませんと

言ひました。

斯くて私は私の見たがつてゐるものあこがれてゐるものが何であるかを知ることが出来ました。

私の心の内がこれ以上の美しい言葉で現はされることが何して出来ませうぞ。

汝はこの沈黙せる高潔にして清楚なる百合の象徴によつて心の静けき安寧、生活の諧調、心靈の明潔を求めつゝあり。

#### 九十五、象徴の百合の花

美しき變化に富めども一の百合の花を有せざる彼の花壇は私には了度渾一及び調和なしに徒費されたる華かな生活のやうに思はれました。

又或る日私は田舎家の庭に多くの愛らしき百合の咲いてゐるのを見ました、私は非常に悦びました、けれどもあゝ、それは生垣によつて私からは隔てられて居りました。

その後私はこの象徴をも會得しました、而してそれが了解されるまで私の胸には影像と憧憬とが満ちて居りました。こゝに注意すべき事が一つあ

ります——といふのは私が花壇に百合の花を求めて得られなかつた土地に於て三歳になる小さい男の子が私の側へ來て實直らしく立つてゐたということです。

私は私の新しい職務の舞臺へと急ぎました、今や私の生活は再び確かな個的形式を取るやうになりましたので私の生活の種々なる外的事情が内的の生活に關して私に如何に影響を及ぼしたか又如何に私の生活が再びその眞實にして高尚なる形貌を取るに至つたかをこゝに述べることは止めませう、何故ならば是等の考察をそのすべての隨伴事件と共にして開展するとあまり長くなるのを恐るゝからであります。

一八一四年の八月の初頃に私はベルリンに着きました、而して直ちに私の豫約してあつた任命を受けました、私の職務は私に一日の中大部分を鑛物の中に、自然の沈黙せる變化窮りなき創造力の默せる觀察の中に忙しく過させます、而して私は鎖された極く静かな室でそれらの配列に注意しな

ければなりませんでした。

この仕事に従事してゐる間にも絶えず私は今まで長い間豫覺してゐた事の眞實であることを確信しました——即ち岩床から撈ぎ取られたこれらの所謂無情の石及び岩の斷片の中にさへ變化發達するエネルギーと活動の萌芽とが現れて居るのであります。私を取巻いてゐる形式の不同の中に私はあらゆる變化の下に通ずる進展の一つの法則を認めました、ゲッテンゲンに於て心靈の進展の秩序を確證する外的事情の中に私が跡を追つて來たと思つたすべての事柄が此處に於ても亦幾百といふ現象となつて私の前に現れて來ました。

私が偉大なるもの高尚なるものに於て、人間の生活に於て、將又神の道に於て人間種族の發達のために役に立つと認めた所のものを私は自然のみが形造る所の是等の定つた形の最も小なるものゝ中にさへ認めることが出來るといふことを發見しました。

私は未だ嘗つて經驗したことのない位明かに神

に似たるものゝみが偉大であるのではないといふことを知りました、何故ならば神に似たるものは甚だ小さきものゝ中にもあります、それは最も微小な容積の中にもそのすべての全さと力とを以て現れて居ります、而して其後は岩石も結晶も人類並びに人の進展及び歴史を見出すことの出來る鏡のやうな役をしました、是等のものは私の内に力強く活動し始めました、而して私が今臆氣に知覺したことを私は直きにもつとはつきりと考へるやうになり綿密に研究することが出來るやうになりました。

#### 九十六、大學教授たり得ざる二欠點

地質學と結晶學とは智識と洞察力のより高き部内を私達に見せてくれるばかりでなく私の考究、思索及び努力のより高き目標を私に示してくれました。自然と人とはそのすべての無數の進展の階段によつて互に説明しやうとするやうに私には見えませんでした。

私の見る所によると人といふものは自然物の智

識から、殊にそれが根底から全然不同であるがために彼自身に就ての智識の基礎と案内及びその智識を表現する準備を授かります。

私が簡単な自然物の中に斯くも明かに知覺し得たものに就ては私は直きに私の注意を惹く生きた自然界即植物に、延び行くものに、動物界に、その證跡を探りました。間もなく私は是等の心持をその孤立せる上昇的な階級に於てのみでなく生活の全部を通して正確に直截に際立たして置くといふことが人間の教養及び發達のために、人間の天職の遂行のために、活氣ある何物にも勝つてゐるといふ考へに全然浸徹され吸引されて了ひました。その上私は高等教育の中心、出来ることなら大學の教授にならうと思つて高等教育法を研究しやうと決心しました、けれども間もなく私はこの思附に於て私を速かに失望させた二つの欠點を發見しました。それは第一に私は特別に研究したものがなく古學の修養に乏しいといふことでありました、次ぎには私は自然科學の高等部門に必要な準

備的研究を経てゐないといふことでありました、けれども大學生がその學課に對して懷いてゐる興味は左様な點にまで立入つて私を苦しめやうとする程無心ではありませんでした。

私は直きに二つの眞理を知覺しました。第一に人といふものは早くから自然に就ての智識と自然の方法の洞察とに導かれねばなりません——換言すれば人といふものは最初からこの考を以て特別に訓練されねばならぬといふことであります、それから第二に生活進展のすべての階段を経て導かれた人々はその目的、天職、天命を遂行させるために極く始めから誤つた觀念を持つ人々や粗忽な人々と一緒にならぬやうに注意されなければならぬといふことを知つたのであります。乃で私は人の教育といふ普遍的な事業に自分の一身を献げやうと決心しました。

礦物學、結晶學、地質學等の立派な講演が私をして自然の仕事の均一なることを悟らしめました、が而かも尙より高くより偉大なる渾一が私の心に

ありました。例へば種類を異にした根本の形のあつまりから進んで來た形を見るといふことは私に不満足之感を起させました。

私の思想と努力の前に横つてゐた對稱はすべて他の形がそれから引き出されるやうな典型原理となるべき自明の形に於て外的の形の下に横つてゐるより高き渾一を持ち來すことでありました。

けれども私は形の法則を結晶のためにばかりでなく國語のためにも同様に確固と定めたいと思つてゐましたので最後に私の思想を惹きつけたものは國語に對する特に深い哲學的の見解でありました。

#### 九十七、國語に對する哲學的見解

餘程前に瑞西で私の考附いた國語に關する觀念が再び私の心に群つて來ました。

私には母音のアー、オー、ウー、エー、イー、エー、アウ、アイが力、精神、(内的)主觀を現し、子音が物質、身體、(外的)客觀を象徵してゐるやうに思はれました。けれども生活や自然に於ける如くすべ

ての反對はたゞ相對的にのみ反對されるのであつて兩反對はあらゆる群れ、あらゆる世界の中に含まれてゐることが分ります、それ故に國語の中にも話調の世界に主觀と客觀の兩面を知覺するのであります、例へばイーといふ音は絶對の主觀中央を現します、而してアーといふ音は絶對の物質的客觀を現します、エーといふ音はその如き生活、一般に存在といふことを示しオーといふ音は個人生活即それ自身のみに狭められた存在を示します。

思想を現す道具としてのみでなく、生活のあらゆる形及びあらはれの典型若しくは概要としての國語は表現の一般的法則の下に横つてゐるやうに私には見えしました。古語教授の中に例證されて居るこの法例を充分に學ぶために私は良教師の下に附いて古語の研究を始めました、而して古語習得のために何ししてもたよなくてはならぬと思ふ特殊の研究法を案出しやうとしました。

この時以來私は私のすべての考案を教育法に傾けました、私は古代哲學の歴史の批判的の講演を

聞いて更に勵まされました。この講演は私に私の自然觀及び人類進展の法則の強固であるといふ明かな確信を與へました。

自然の力學的な化學的な義理的な部面を研究の對稱としてゐましたので私は再び特に形を以て示されたる數の法則と考へるやうになりました、而してこれは私を同問題の全然新しい概念に導いて行きました——即ち數といふものは水平的にのみ關係してゐると考へらるべきものであるといふことなのです。

この問題を斯く考へるといふことは實際に當つて非常に明確である所の算術の極く簡單な根本的概念にまで私を導きます、是等の（力學的な算術的な）諸現象の結合といふことは私には可證的に見易いことでありました。何故ならば算術は先づ力の現れの外的形貌として考へられ又（それが人間に關係して居るといふ所から）人間の思想の法則の一例として考へられるからであります。

すべての方面に於て自然を通じ、歴史を通じ、

生活を通じ、科學を通じ（純正科學を通じ應用科學を通じ）私は渾一、單一及び人類進展と人類教育の變ることなき必須課程によつて斯く訴へられ要せらるゝのであります。

私は私のペンと私の生活の全力を盡して教育體系の形に於てその渾一と單一とを現さうとする止み難き衝動に驅られるやうになりました。

私は教育も科學と同じやうに人性に關係のある人性と密接した教育の題目の取扱ひ及び考察によつて進んで行くものであらうと感じました。

九十八、友に教育法を教ゆ

私は又他の原因からこの確信を懷くやうになつたのでした、それは次に述べるやうなものです、

我が友ランゲター、ミッデンドルフ及びバウエルは私と共に同じ軍團、同じ大隊に屬して戦争に従事してゐましたけれども私達は戦役の終頃、殊に和蘭に屯營してゐた頃には互に離れてゐることが多くなりました、それですから軍團の解散した時に友は何處へ行くのか分りませんでした。そ

れですから後日ベルリンで皆と再會した時は非常に嬉しく思ひました、私の友は熱心に神學を研究してゐました、私は自然科學を研究して居りました、それですから私達は互に會ふことは極く稀でありました。

斯くて數月は経ました、すると生活は私達を再び一緒に纏めました、これらは一八一五年の非常召集によつてあります、私達は皆義勇兵として再び應募しました、私達は前に勤務したことがあるのと皇室の思召とによつて直ちに士官の列に加へられました。しかしながら應募兵が澤山あつたので官吏が職を棄て、學生がその學業を擲つて應募する必要がないことになりました、乃で私達も出征するに及ばずといふ命令を受取りました、直きに出征することゝ信じてゐたミッテンドルフはベルリンへ止つてゐるのは暫時の間と思つて下宿を決めて居りませんでした、而して私のところ二人に充分な室がありましたのでミッテンドルフ

フは私と同宿することになりました。けれども始めの中は互に専攻科目が違ふのであまり緊密な關係を結びませんでした、けれども直きに親密になり専攻科目が違ふといふことが反つて二人を一層親しくさせることになりました。

ランゲルタールとミッテンドルフとは彼等の大學に於ける學費を充分にする爲に學務の妨げとならぬやうに都合よく家庭教師をして居りました、兩人は始めの内は何事も簡易に濟んで行くやうに思つて居りましたが間もなくその托された子供の教授訓練に關して困難を感じるやうになりました、私達は以前よくこの種のとを話題としてゐましたので兩人は私の許へ相談に來ました、特に數理的教授と算術とに關してはよく私の許へ來ました、而して私達は毎週二時間宛空けて置いてこの時間に私がこれらの事柄に就て二人に教へてやりました。この時以來私達の思想の相互關係は再び活氣附けられ間斷なきものとなりました。(了)

# 幼 稚 園 用 品

## 家 庭 用 玩 具

東 京 九 段

### フ レ ー ル 館

新築後工場も整頓致し店も精々片付申候間益々  
 業務に奮勵仕り物品を精選し格價を最も低廉に御  
 需に應じ可申候に倍舊の御愛顧を願上候

## 日 本 玩 具 研 究 會 會 員 募 集

會費は一月五拾錢にて研究した面白い御爲めになるよい玩具が毎月得られます(申込次第規則書送る)

### 本 會 評 議 員

|        |        |       |
|--------|--------|-------|
| 巖谷 小波  | 甲賀 藤子  | 吉田 熊次 |
| 多田房之助  | 野口 ゆか  | 倉橋 惣三 |
| 黒田 定治  | 久留島 武彦 | 山脇 春樹 |
| 町田 則文  | 小西 信八  | 三土 忠造 |
| 三輪田 元道 | 莊司市太郎  | 森村 開作 |

### 本 會 幹 事

|       |        |       |
|-------|--------|-------|
| 稻垣 知剛 | 和田 實   | 河野 清丸 |
| 高市 次郎 | 曾根松太郎  | 武藤 忠義 |
| 野村 忠寛 | 松田 茂   | 藤 五代策 |
| 岸邊 福雄 | 御園生金太郎 |       |

申込所 東京九段 日本玩具研究會